

## 第4章 総括

### 第1節 墳丘・埋葬施設の特徴

#### 1. 墳丘形態・規模

県道30号から見上げた墳丘や、測量図の前方後円形の平面図からも茶臼山古墳は大規模で、かつ整然とした前方後円墳の姿をとどめていると考えられる。しかし、墓造當時から今日までの経年、幾多の自然現象・雨水等による浸蝕・滑落のために原状は変化していると思われる。

発掘調査において古墳の平面的規模の復元を試みたが、未掘部分も多いうえに定点と考えられる場所は前方部の長さ約965cmを測る段状の遺構のみであった。この段を前方部の墳端とし前方幅の想定を行ったが、前方部の墳丘測量図でわかるように北西側半分は未発掘のため確認はできていない。そこで前方部北東（右）のZRT地山傾斜の変換点と浅い溝状の落ち込みから、段状の遺構はさらに約115cm延びることを推定し、墳丘中軸線から約930cmを前方幅の半分、幅全長を約1860cmと仮定した。この見極めは墳丘測量図の-350～-375cmセンターが全周・完結せずに上位の丘陵尾根筋にとけ込むことにも示唆を受けている。

後円部はZC1T内で確認した地山掘り込み・溝の外周、後円測量図変換点などから、意的ではあるが後円部の中心と思しき点を利用して直径約3600cmの後円部径を想定した。後円部南西側の定点は押さえきれ

ていないが、前方幅の中点と後円中点を結ぶ前方・後円両端間の距離は約7200cmを測ることになる。これは前方部（-306cm）から後円部（-335cm）に向かい、中央で凹部を持って緩やかに下降する地山の削平面、およびその上位に重ねて平行に土盛りされた二層の盛土基盤層の距離ともほぼ同数値を示すと考えられる。前方部長・幅と後円部径によって全長が確定されると、前方部端からくびれ部までの形状が問題になるが、その具体性を把握するための状況証拠や記録は少なく、前方部の測量図や側面に設けられたトレンチ内の盛土およ

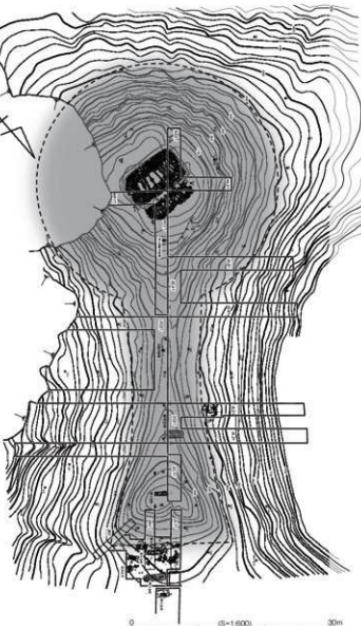


図65 墳丘規模想定図

び葺石・埴輪の分布状況などから推測を行わざるを得ない。なお、どのトレンチでも同様であるが葺石・埴輪などは破損・散乱しており原形・原位置を保っているものは確認できていない。

埴輪片はKC3-Tで数点見られたが、他は前方部が中心でありZC3-1T, ZR4-2-3-1T, Z3-1LTの8本のトレンチなどからである。前方部ほぼ中央のZL3Tでは地山平坦面、盛土、埴輪・石材の分布などから中軸線から400~500cm、対応するZR3Tでも550cm付近で埴輪・石材の分布、ZR4Tでは約700cmで溝状の凹みと埴輪の分布が認められたことから墳形の推定線を描いた。くびれ部の幅はおよそ1,200~1,400cmを測る。両墳頂の比高差は約100cmを測る。

推定規模は、全長は7,200cm、後円部径3,600cm、後円部高(335cm)、くびれ部幅1,200cm、前方部長3,600cm、前方部幅1,860cm、前方部高203cmを測る。あくまでも盛土、埴輪・石材分布から想定したものであり、描いた墳丘平面図は調査の墳丘測量図とはイメージが異なり前方部中央の側面がかなり細身で、前方部端に向かって撥状に聞く。

自然地形を巧みに利用した築造と考えられるが、築造当初の意図までは計り知ることはできない。自然地形の起伏を切断・削平し、墳形プランを地山平坦面に作り出す時点で、平坦面から下方拡張がになる斜面部には、墳丘外表から連続する傾斜の地山整形が行われたと考えられ、古墳をさらに大きく目立たせようとする工夫を見て取れる。この見せかけの墳丘規模に関しては定点を求めることが難しく、この時期の前方後円墳築造の工夫の傾向と把握しておきたい。(高畠)

## 2. 第1主体部の石室構築概念

- (1) 墓壙を形成する。(排水施設構築の可能性)
- (2) 掘り方底全面に板状安山岩を敷き、さらに小さめの板状安山岩を重ねて中央部を少し高くする。
- (3) 径約20cmの安山岩角礫を(2)の上全面に積む。
- (4) 径5~20cmの扁平な円礫を角礫の安定のため2、3重に敷き詰めて角礫間の隙間を埋める。ここでも中央に円礫による長方形に近い高まりを作る。
- (5) 円礫高まりの上部に、掘り方南辺に平行する長軸570cm、短軸85~110cm、厚さ平均15cmの粘土を台形状に積み固め粘土床を作る。粘土床上面はわずかな凹みを持つ。
- (6) 粘土床裾を丸むように厚めの扁平な安山岩を根石②(基底石)とし、同形状の石材を円礫上全面に敷く。
- (7) 根石②上に2~3段の扁平な厚めの安山岩を垂直に積み、粘土床上端面に根石①の下端面をレベル的に合わせ、粘土床との間隙を作る。
- (8) 全面に敷かれた厚めの扁平な安山岩上に(4)と同じ扁平な円礫を全面に載せて隙間を埋め平坦・安定を確保している。この時点で赤色顔料の塗布あり。
- (9) 円礫上に板状安山岩を根石③の平面形にあわせて約130cm積み上げば真っ直ぐな四壁を構成、石積みは横口積みも混じるが圧倒的に小口積みを利用。石室を板状安山岩で形作りながら、同時に掘り方との間に表込めの安山岩・花崗岩の角礫を充填させているが砂・土の使用は非常に少ない。この間にも石室内に赤色顔料の塗布があり。
- (10) 四壁構築後に巨大な板・柱状の天井石を被せ、天井石の隙間に小石を詰めて石室を完成させる。
- (11) 天井石および表込めの角礫をすべて粘土で被覆する。天井石上部は特に厚く粘土を使用する。
- (12) 粘土上面を花崗岩のバイラン土で埋め、墓壙内を充填し、墳頂平坦部を完成させる。

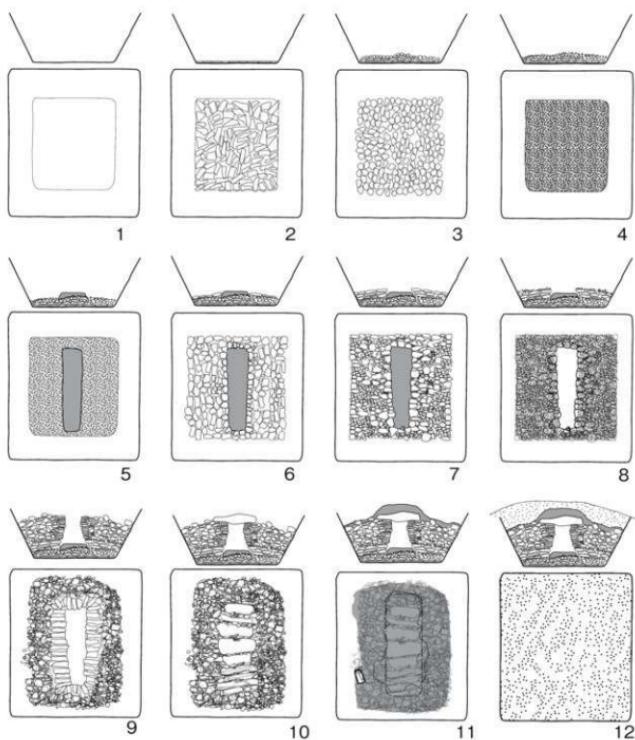


図 66 第 I 主体部铸造過程模式図

(1)・(2)・(3)に関しては小範囲の確認のみであり概念的な説明である。また、墓壙の築造や死者・副葬品などの石室内への搬入については、どのような時点でどのような方法が執られるのかが不明ため保留とし、今後の類例資料の増加を待ちたい。(高畠)

## 第2節 出土遺物の特徴及び年代

本墳の築造時期を推定する資料として、第Ⅰ・Ⅱ主体部の副葬品、埴丘及び周辺から出土した土師器・埴輪がある。副葬品は、単独で出土し年代の位置付けが難しい画文帶神獣鏡以外で、最古相若しくはそれに次ぐ型式の腕輪形石製品(北條芳隆氏の第1群第1・2段階、北條1996)、装具が複数部材から構成される直線的な柄縁をもつヤリ(豊島直線型A・B類、豊島2010)、短腹式鉢窓・大型柳葉式鉢窓(短茎長三角B式・大型柳葉B式、川畠2009)がある。各氏によるこれらの年代的な位置付けは古墳時代前期の中でも幅をもっているが、想定されている年代の中心は古墳前期前半にある。また、各副葬品の時期比定は、船載・倭製三角縁神獣鏡研究に携るところが大きいが、本地域の前期古墳のように副葬品の全体組成が必ずしも明らかではない場合は、地域内の編年的な位置付けを行う際には、諸墳を網羅することのできる考古資料を用いる必要がある。

ここでは、土師器・埴輪を取り上げて、本墳の築造時期を考える。

### 1. 土師器からみた築造年代の推定

**出土資料をもつ前提条件** 出土した土師器の中で本墳に伴うことが確実な資料として、まず、第Ⅰ主体部石櫛内及び墓壙内裏込から出土した一群が挙げられる。これに次ぐ資料として、前端部に転落した葺石・埴輪群に伴う土師器群がある。第Ⅰ主体部の土師器は、無頸壺(20.28)・鉢(27.29.30)から構成されているが、無頸壺は集落からの出土例が少なく、鉢については形態変化が散漫なこともあり、細かな時間的位置づけが難しい。一方で、前端部から出土した土師器には、編年上の軸となることが多い高杯(149.150)が含まれている。しかし、本地域を含め古墳前期の土器様式に椀形高杯が伴うことは極めて稀であり、これを用いて築造時期を推定することは困難と言わざるをえない。

以上のような前提条件を考慮して、ここでは前端部から出土した甕(99)を検討対象に選びたい。また、小片であるが、本地域の前期古墳に多く供獻される弥生後期以来の広口壺を祖形とする広口壺形埴輪(137)も併せて検討し、本墳の築造時期を推定することをしたい。

**前端部出土の土師器甕の特性と型式組列** 土師器甕(99)は、胴部外面に平行タキの後縦ハケ、内面は上半に外面のタキに対応した指オサエとこれを切るケズリが施され、口縁部は強いヨコナデを作り「く」の字形の形態をもつ。このような調整手法をもつ甕は、「香東川下流域產器」と呼ばれ、本地域の弥生後期から古墳前期まで系統的な在り方で持続することが知られている(大久保1990.2003)。また、弥生後期から終末期までは角四粒を多用する特徴的な胎土と、上記の型式学的特徴に強い相関が認められるが、古墳前期にはそれが希薄となりつつも型式学的特徴は継続することが明らかにされている(大久保1993.2006)。そして、古墳前期以降は、讃岐・阿波の両地域で组成することが指摘されており、藏本晋司氏によって「東四国系土器群」と呼称されている甕に相当する(藏本1999)。これらの先行研究を踏まえると、土師器甕(99)は本墳の築造時期を推定する良好な資料と考えることができる。以下では、まず型式組列を設定した上で、主に集落出土資料を中心とした編年案の提示と進み、本墳の時間的位置を推定する。

**型式組列** 弥生終末期から古墳前期にかけての「香東川下流域產」の甕について、完形品若しくは一定程度の形態が明らかになる資料を用いて、型式設定を行う。

A 1 型式 脇部最大径は上位にあり、肩部から内傾しながら立ち上がる頸部をもつ。口縁部は内面に稜線を

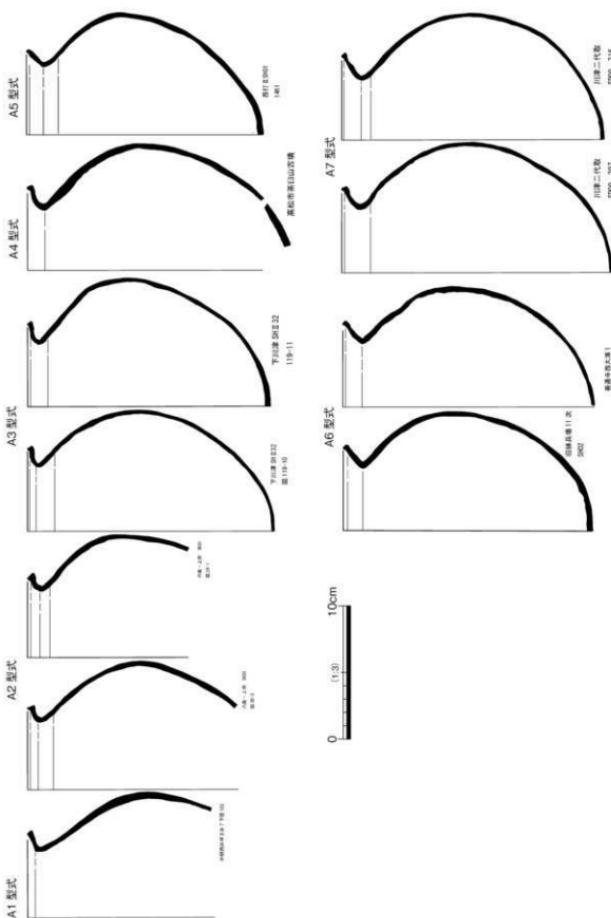


図 67 土師器變型式分類

形成して外側に開く。口縁端部はヨコナデによってやや肥厚され、内側に窪みを残す。胴部外面は緩ハケのみで、多くの個体で弥生後期から継続してみられた縦ミガキが失われている。

A 2 型式 脇部最大径は上位にあり、くの字状に屈曲する口縁部の内面はやや丸みをもつ。口縁端部は面取りされ、上方にやや拡張される。

A 3 型式 脇部最大径は上位にあり確な肩部を形成するが、胴部下半の球形化が進み、底部は痕跡的な平坦面が僅かに残る。口縁部は内面に稜線をもって折り返され、受口状にやや内湾し上面に平坦面、端部を上方に拡み上げる。

A 4 型式 A 3 型式と比較して肩部がやや不明瞭となり、口縁部は折り返しが緩くなるとともに間延びする。A 3 型式でみられた口縁部上面の平坦面は消滅し、口頭部境の内面の屈曲点から連続して外反する。胴部は球形化するものの最大径が上位にあることで肩が張る。

A 5 型式 脇部の球形化が一層進むが、未だ最大径は上位にある。口縁部は口頭部境の屈曲点から直線的に立ち上がり、端部内面は窪みをもつ。

A 6 型式 脇部の下半部が球形化することで肩が張らなく、口縁部が口頭部境の 1 点からくの字状に外反する。口縁端部内面は窪み、端部は面取りされる。

A 7 型式 脇部最大径がさらに下降し下彫れの形態となる。口縁部は口頭部境内面の屈曲部に丸みをもって外反する。

#### 広口壺形埴輪の特性と型式組列

前端部から出土した広口壺(137)は、弥生後期の広口壺を祖形とし、本地域の前期古墳には底部穿孔が行われて埴頂・埴裾に四郭配列されるなど、埴輪と同様の取り扱いを受けることが既に明らかにされている(大久保 1996; 森下 1997; 蔡本 2004)。一般的な埴輪とは異なるが、ここでは広口壺形埴輪として本墳の墓造年代を推定する材料として取り上げる。上記の先行研究により型式組列はほぼ完成をみていているが、新資料がみられることと、変や集落出土資料と対応関係を明らかにしておく必要があるため、再度、型式組列を提示しておきたい。

#### 型式組列

B1 型式 脇部最大径を上位にもつ倒卵形の胴部をもち、逆「ハ」の字形に聞く頭部の上位で口縁部が外反する。

B2 型式 最大径は上位にあるが胴部下半が張り、逆「ハ」の字状に聞く頭部の上位において口縁部が外反する。B1 型式とは、胴部最大径の位置や口縁部が内湾しながら大きく外反する点が異なる。

B3 型式 全体形状を窺い知れる資料に乏しいが、逆「ハ」の字状に直線的に聞く頭部から、口縁部が明瞭に内湾して外反する。

B4 型式 頭部形態は B3 型式と同様であるが、頭部上位で口縁部が内湾せずに外反する。

B5 型式 球形化が完了した胴部をもち、口頭部境に不明瞭な器形変化点を残しながら、頭胴部境から口縁部にかけてほぼ連続して外反する。

B6 型式 脇部形態を明らかにすることはできないが、頭胴部境から器形変化点を経ずに頭部・口縁部が連続して外反する。

以上、口縁部・胴部形態から 6 型式を設定した。型式変化の指標となる属性は、胴部の倒卵形から球形化への変化と、逆「ハ」の字状に直線的に聞く頭部から器形変化点を伴いながら外反する口縁部をもつ形態が、頭

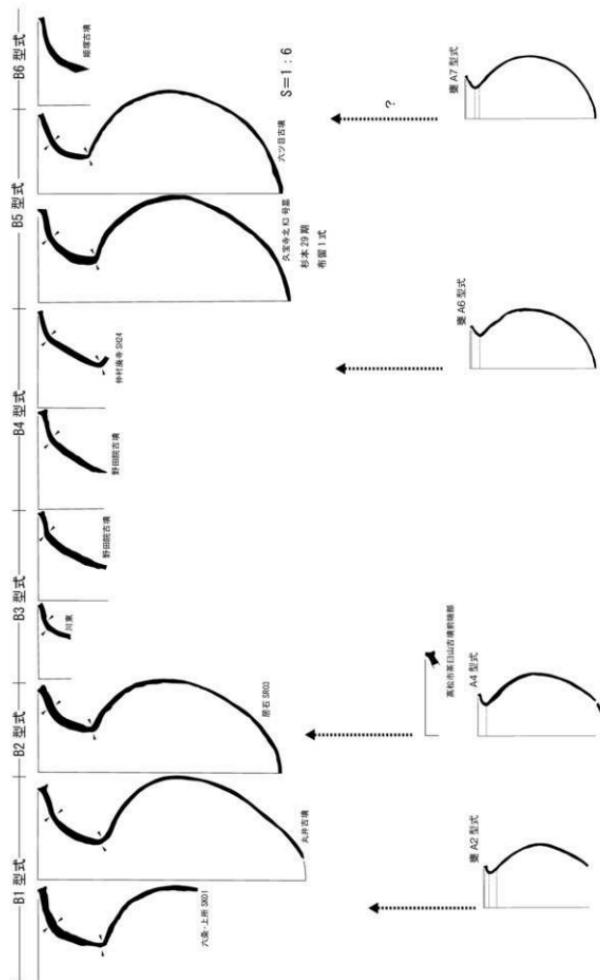


図 68 土師器廣口壺型式分類及び變型式との相関関係

胴部境から口縁端部まで連続して外反する形態変化にある。また、口縁と頭部の形態変化に伴い、胴部に対する口縁・頭部の占める割合が減少していくことも重要な指標となる。

## 編年区分

甕・広口壺の各型式の出土状況は表1のとおりである。甕の各資料群における共伴状況は、A1型式からA7型式まで整合的に推移している。A1からA7型式まで型式学的な変化は十分に想定できる。組み合わせからみた各細別時期については、まずA1・A2・A3・A4+A5で小時期の設定が可能である。A6・A7型式については、空港跡地遺跡 SH10(香川県教委他 2004)、仲村庵寺 SH24(普通寺市教委 1989)など A6型式のみで構成される資料群も存在するが、比較的多くの個体が一括して出土した旧練兵場遺跡 11 次 SH02(香川県教委他 2009)など両者が共存する資料もみられる。したがって、A6・A7型式については、同一時期内での古・新段階として提示し、将来の検証に備える。

広口壺は古墳・集落において甕との共伴関係を確定できる資料が限られる。特にB5・B6型式の共伴資料に乏しい。しかし、断片的ながら六条・上所遺跡 SK01(香川県教委他 1995)や仲村庵寺 SH24などにおいて共伴事例があることから、B1 から B6 型式への変遷の一程度の妥当性は確保できる。

	甕							広口壺					
	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	B1	B2	B3	B4	B5	B6
木太中村SK3001	○												
六条・上所SK01		○	△					○					
丸井古墳								○					
下川津SH II 32		○											
高松市茶臼山古墳			○					○					
西打Ⅱ SH01		○	○					?					
川東古墳									○				
野田院古墳									○	○			
仲村庵寺 SH24					○				○	○			
延命SD21上層									○	?			
空港跡地遺跡 SH10					○					?			
旧練兵場23次Q区SH0007					○	△				?			
旧練兵場11次SH02					○	△				?			
六条古墳										○			
真田下園 TS037						○				?	?		
川津二代目SD09						○				?	?		
姫塚古墳										○			

△: 少量資料又は口縁部破片にその可能性があるもの

表1 各型式の伴出状況

古墳時代の区分点については、A2型式を伴う六条・上所遺跡 SK01 出土資料(香川県教委他 1995)に、本地域の最古段階の前方後円墳である丸井古墳(長尾町教委 1991)で出土する広口壺 B1 型式が含まれているので甕 A2型式・広口壺 B1 型式以降が古墳時代と相当すると考えら

れる。以下では、甕 A2型式・広口壺 B1 型式以降を古墳時代として編年案を提示し、各基準資料に伴う外来系土器や、近畿地方で出土している本地域からの搬入・模倣土器を総めながら、高松市茶臼山古墳の時間的位置を確認する。また、広口壺については、前述のとおり、甕との共伴関係を示す資料に欠落が認められるため、甕型式を中心に時期区分を行い、広口壺の各型式は、主に古墳間の先後関係を把握する際に使用することしたい。古墳前期 I 期

甕 A2型式を指標とし、六条・上所遺跡 SK01 出土資料(香川県教委他 1995)を基準資料とする。近畿地方中河内地域では、亀井北(その 1)遺跡 SD8021(大阪府教委他 1999)において、甕 A2型式の模倣土器が布留 0 式(寺澤 1986)・若林様相 5 新(若林 2003)・杉本 27 期(杉本 2003)に比定される資料と共に伴している。広口壺は六条・上所遺跡 SK01 において B1 型式が伴う。本地域の既往の編年では、大久保氏の 6 段階に相当する(大久保 2004)。

2 出土遺物の特徴及び年代 土器器

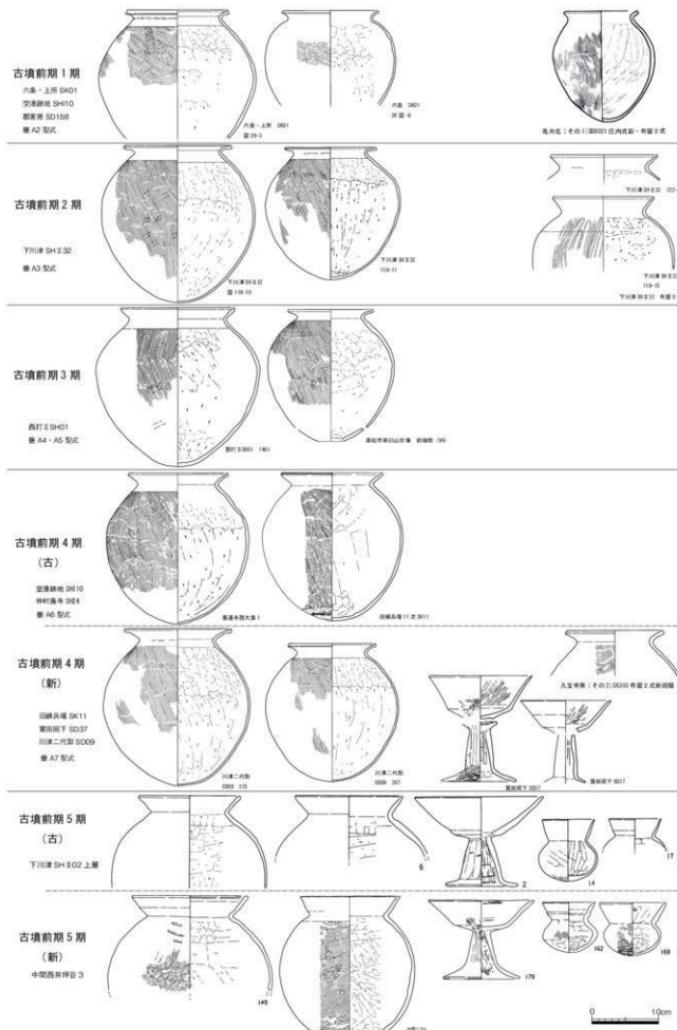


図69 編年

#### 第4章 総括

##### 古墳前期2期

甕 A3型式を指標とし、下川津遺跡 SH II 32出土資料(香川県教委他1990)を基準資料とする。下川津遺跡では、生駒西麓産と思われる胎土をもち搬入品の可能性が高い布留系甕を伴う(大久保2004)。布留系甕の口縁端部内面は肥厚されているが、口頭部端面は尖らない。寺澤氏の布留0式(寺澤1986)に位置付けられると考えられ、最近の編年では若林氏の様相6古段階(若林2003)、杉本氏の27期(杉本2003)に比定される。本地域の既往の編年では、大久保氏の下川津Ⅷ式(大久保1990)、7段階に相当する(大久保2004)。

##### 古墳前期3期

甕 A4・A5型式を指標とし、西打遺跡 SH01 出土資料を基準資料とする。高松市茶臼山古墳では A4 型式のみとなるが、西打遺跡 SH01(香川県教委他2002)では両者が共伴する。今後細分される可能性があるが、現時点では両型式が共存する時期として捉える。広口甕は小破片ながら、高松市茶臼山古墳前端部で B2 型式とみられる資料(137)が出土しており、本時期に伴う可能性が高い。本地域の既往の編年では、大久保氏の7段階に対応すると考えられるが、甕型式を重視し、本案では細分を行う。

##### 古墳前期4期(古)

甕 A6型式を指標とし、空港跡地遺跡 SH10 出土資料(香川県教委他2004)、仲村庵寺 SH24 出土資料(普通寺市教委1989)等を基準資料とする。また、旧練兵場11号 SH02 や23号 Q区 SH0007では、甕 A7型式が少量伴うことから、予察的に一様式内の古・新の二段階に細分して提示しておきたい。広口甕との対応関係は、仲村庵寺遺跡 SH24において甕 A6型式と広口甕 B4型式が共伴している。また、延命遺跡 SD21(香川県教委他1990)では広口甕 B3 と B4型式が組み合い、野田院古墳(普通寺市教委2003)においても両者が共存する。甕 A6型式に広口甕 B3・B4型式が伴うと考えられる。本地域の既往の編年では、大久保氏の8段階に対応する(大久保2004)。

##### 古墳前期4期(新)

甕 A7型式指標とし、川津二代取遺跡 SD09(香川県教委他1995)、賀田岡下遺跡 SD37(香川県教委他2004)を基準資料とする。川津二代取遺跡や賀田岡下遺跡では布留2式併行とみられる少量の高杯や小型丸底甕を伴うが、本期まで弥生後期から継続するタキ甕・鉢類が残存する。近畿地方の中河内地域の久宝寺南(その2) SX303(大阪府教委他1999)では、寺澤氏の布留2式(寺澤1986)、若林氏の様相7(若林2003)、杉本氏の30期(杉本2003)の土器群に甕 A7型式の搬入品?が伴う。本期における広口甕との共伴を示す良好な資料がみられない。広口甕にみられる球形化した胴部を考慮すると、B5・B6型式のいずれかが伴う可能性が高いが、確定には至らない。本地域の既往の編年では、大久保氏の8段階に相当する(大久保2004)。

##### 古墳前期5期

本稿で検討している香東川下流域産の甕形式や、弥生後期以来のタキ甕・鉢が消滅し、布留様式への転換が完了した段階である。主な検討対象の時期からは外れるが、土器様式上では古墳時代初頭よりも変化の度合が大きいため、ここで提示しておく。基準資料として、下川津 SH II 02 上層(香川県教委他1990)、中間西井坪遺跡谷3出土資料(香川県教委1996)がある。布留系甕の形態や小型丸底甕からみて、寺澤氏の布留3式、若林氏の様相8、杉本氏の31期に併行すると考えられる。また、小型丸底甕・高杯にみられる形態差から、下川津遺跡 SH II 02 上層と中間西井坪遺跡谷3出土資料を時間差として捉えて、2時期に細分した編年案を提示しておく。本地域の既往の編年では、大久保氏の下川津Ⅷ式(大久保1990)、9段階(大久保2004)に対応する。

以上、型式の共伴状況からみた各時期の基準資料と、併行関係を推定できる外来系土器、近畿地方へ搬入・模倣された各型式と伴出した土器群の特徴を概観した。併行関係を推定する資料が少量に止まるため、確定には至らないが、古墳前期1~2期が寺澤氏の布留0式、古墳前期4新段階が布留2式、古墳前期5期が布留3

式と時間的な接点をもつと考えられる。広口壺B5型式は、近畿地方の中河内地域の久宝寺南(その1)K3号墓上層堆積において寺沢氏の布留1式、杉本氏の29期、若林氏の様相6とされる資料と共に作成している(大阪府教育委員会1999)が、壺との共伴資料を欠いている。壺A6型式と広口壺B4型式が共伴関係にあり、久宝寺南S×303において壺A7型式が布留2式と時間的接点をもつならば、古墳前期4期古段階と同新段階の間に、布留1式と2式の境を想定することができる。高松市茶臼山古墳は、古墳前期3期に位置付けられるが、本段階における併行関係推定できる嵌入・模倣土器を欠いている。古墳前期2期が布留0式に併行し、古墳前期4期の古段階が布留1式末業と時間的な接点をもつ可能性が高いなど相対的な関係からみて古墳前期3期は布留1式と時間的な接点を共有する可能性が高い。

以上のような資料の状況から、確定的ではないものの高松市茶臼山古墳の築造時期を近畿地方の寺澤氏の編年における布留1式併行期でも古相として捉える。

## 2. 墳輪の特徴と帰属時期

前方部を中心とした埴輪は、口縁部形態を中心にして大きな特徴をもっている。ここでは、埴輪の全体形状や樹立状況、編年の位置についてまとめておく。

### 全体形状の推定

確認した限りにおいては、壺形埴輪(本地域にみられる広口壺形埴輪を除く)はみられず、すべて円筒埴輪から構成されている。完形品に復元できる個体はみられないため、正確な胴部の段数は把握できないが、各部位を組み合わせながら全体形状を復元していく。口縁部形態は微細な個体差を孕みつつも、頭部から内湾気味に外側に開いた後、更に途中で外側へ大きく反転する二重口縁のみで構成される。反転部には擬口縁が形成されており、上端を肥厚させることにより、接合の強度を保っている。このような口縁部の形態は、一見、二重口縁壺を想起させるものがあるが、頭部の締まり具合はそれに及ばない。頭部から肩部への移行は、直線的になるものや、丸みをもつものがあり、口縁部と同様に個体差がみられる。内傾した状態の傾きで復元される突帯が存在することから、肩部と胴部の境に最上段の突帯が施されていると考えられる。突帯の間隔は、資料の現況から約10cm~15cmと推測されるが、各段全て同一であったとは考え難い。また、基底から一段目の突帯までの間隔は25cm以上となり、この部位の間隔が最も長くなる。

透孔は、三角、方形が存在することは確実であり、小型の円形を呈する資料については、後述する船岡山古墳との類似性を考慮すると、巴形である可能性が高い。底部形態は、やや丸みをもって立ち上がり、直線的なものはみられない。胴部片においても、張りをもつ資料が多くみられることから、胴張りの形態を推定できる。突帯の断面形状は、上端部をやや上方に挿み上げ方形を呈するものと、先細りで下向きに施される二者が存在する。後者には、突帯上面に刻目を施す資料もみられる。この両者は、胴部の各段によって使い分けられていた可能性が高いが、その組み合せを推定できる資料はみられない。

肩部・胴部の外側調整は全て縦ハケであり、底部のみ縦ケズリが行われる。突帯が剥落した資料の観察から、胴部外側調整は、縦ハケ後底部付近のみタケズリ、突帯貼り付けに伴う削付の沈線、突帯貼り付けとナデ、ベンガラとみられる赤色顔料の塗布へと進んだことが窺える。内側調整は縦ハケ後、ケズリの順番となってお



図70 墳輪復元模式図

り、縦ハケを残す資料が少ないとみることができる。

以上の観察と強い類似性が指摘できる船岡山古墳出土埴輪を参考にして、3条4段で復元したのが図70である。透孔配置や段数については確定することはできないが、全体の形状については、本図を大きく逸脱するものではないと考えておきたい。

#### 樹立状況の復元

円筒埴輪は現地調査において、樹立状態での出土は全く確認されておらず、埴輪付近において転落・移動を受け碎片化した状態で出土している。各トレンチでの埴輪の出土点数は以下のとおりである。

後円部頂:KL3T(68点) 捩れ部頂:ZC3T(1点) 前方部頂:ZC1T(12点) 前端部:ZL1T(52点)-ZR1T(218点)  
ZL1T-ZR1T間拡張部(490点) 前方部北側面～埴輪付近:ZL3T(28点) 前方部南側面～埴輪付近:ZR2T(8点)  
ZR3T(14点)

破片数は、前端部・前方部北側面・後円部墳頂上に集中する傾向があり、前端部が最も多い。拡張部頂のZC3Tからの1点は、その両サイドのZL1T・ZR4Tから埴輪が出土していないことからみて、後円部頂からの流入品と考えられる。そうであるならば、埴輪の分布は後円部と前方部に絞られる。埴輪搬定位置に樹立された痕跡がみられず、葺石とともに二次的に移動を受けた状態で出土していることや、埴丘斜面にテラスが確認されていないことなどからみて、円筒埴輪は後円部頂と前方部頂に限って樹立されていたことになる。また、円筒埴輪口縁部の破片数の計測では、3～4個体分しか復元できない。トレンチ調査を中心としていることも影響していると考えられるが、それでも後円部・前方部頂に樹立された埴輪の個体数はかなり少ないと捉えておいた方がよいだろう。

#### 類似資料の探索と讃岐地域初期の円筒埴輪

出土資料の特徴からみて、本墳出土埴輪は広域編年におけるⅠ期中相(廣瀬2009,2011)比定されるもので、出現期に属するとみてよい。しかし、出現期の埴輪は、地域差・系統差が大きく、細かな併行関係を推定し難い。ここでは、本地域における出現期を中心とした既往の資料との比較を行うことにより、時間的位置付けを行い、今後の広域における時間的な位置付けに備えておきたい。

最も近い特徴をもつ円筒埴輪に、高松市船岡山古墳出土資料がある(高松市教委2010,2011,2012,2013,大久保2013)。その主な特徴を列挙すると、二重口縁形態、胴張の胴部形態、胴部突帯形態及び刻目、巴形透孔周間に施される線刻及びその他の線刻、内面調整における徹底したケズリなどが挙げられる。これらから本墳出土埴輪と同一系統の埴輪群と考えてよく、船岡山型埴輪と呼称されている(大久保2013)。口縁部の外反度や頭部形態からみて、本墳出土埴輪が時間的に後出すると考えられる。

本地域での出現期の円筒埴輪の既往の調査資料として、快天山古墳(綾歌町教委2004)、御産塗山古墳(香川県教委1989,大久保1996b)がある。これらの円筒埴輪は、基底部から最上段まで筒形の胴部をもち、最上段突帯から口縁部周部までが短く「短口縁」をもつことに共通点がある。また、円筒埴輪以外に蓋形埴輪を伴い、後出的要素である器材形埴輪を伴わない。この内、「短口縁」や筒形の胴部形態は、口縁部の発達や器材形埴輪の組成などからみて時間的に後出るとみられる鶴部不明墳(大久保1996b)、岩崎山4号墳(大久保1996b,さぬき市教委2013)へと繋がる主要な属性であり、快天山古墳・御産塗山古墳出土資料は本地域において一般化する普通円筒埴輪の形相と考えられよう。船岡山型埴輪との比較では、口縁部・胴部形態の差異が著しく同一系統として取り扱うことは困難である。また、船岡山型埴輪に対して円筒埴輪という名称を与えるのも適切ではないかもしれない。別系統となるために型式学的な特徴から時間的前後関係を把握することが困難であるが、快天山古墳・御産塗山古墳には非在地系統の二重口縁の蓋形埴輪を伴うことや、快天山古墳で墳頂・テラ



図 71 船岡山古墳出土埴輪

ス等において円筒埴輪が多量に樹立される状況を考慮すれば、船岡山型埴輪が時間的に先行する可能性が高い。従って、船岡山型埴輪は、本地域における最初期の埴輪群の一つとして位置付けられよう。また、本墳の築造以後継続しない点や、船岡山古墳と型式学的距離の近さからみて、短期間に製作された一群の資料として評価できる。

残る課題は、その粗形を何に求めるのかという点と、本地域における船岡山型埴輪導入の時間的な上限がどこまで遡るのかという点にある。快天山古墳や御産靈山古墳にみられた普通円筒埴輪以外の資料をもつ古墳として、近年、稲荷山姫塚古墳出土資料が知られている(高松市教委 2014)。稲荷山姫塚古墳出土の埴輪は、円筒形の胴部をもち突帯上面に刻目をもつことで船岡山古墳・本墳と共通するが、径・形態胴部外面の線刻などに違いがある。また、広口形・複合口縁形の壺形埴輪や、器台形?・扁平な壺形埴輪、円筒形の胴部二条突帯など多様であり船岡山型埴輪との単純な比較検討が困難である。その粗形については、船岡山古墳・稲荷山姫塚古墳の調査報告書の刊行が行われ具体相が明らかになるのを待って検討されるべきであろう。

船岡山古墳や本墳・稲荷山姫塚にみられる埴輪の様態が、本地域における最古相の前方後円墳である鶴尾神

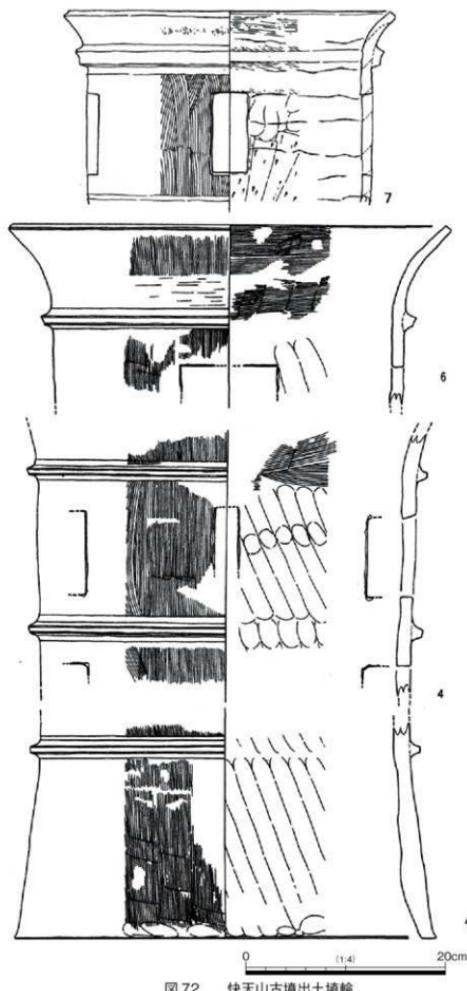


図 72 快天山古墳出土埴輪

社 4 号墳(高松市教委 1983)や丸井古墳(長尾町教委 1991)まで遡ることはない。問題はこれらとの時間的な間隔をどの程度見積もるのかであるが、埴輪そのものからのこれ以上の追求は困難である。次項では、土師器編年を踏まえて、本墳の築造時期を推定する。

### 3. 高松市茶臼山古墳の編年的位置

個別の検討を行った土師器・埴輪を用いて、高松市茶臼山古墳を本地域における前期古墳編年に位置付ける。時期区分は土師器編年を使用するが、墳丘形態・石榔構造・出土遺物等の属性を網羅した大久保氏の古墳編年案との対応関係も併記することで、その充実を図りたい(大久保 2013)。

#### 古墳前期 1 期

丸井古墳・鶴尾神社 4 号墳が相当する。鶴尾神社 4 号墳出土資料は、香東川下流域産の細頸壺や頭部が内傾する広口壺を主要器種として、本節で検討した壺、広口壺を伴っていないが、古墳前期 2 期の基準資料となる下川津遺跡 SH II 32 にこれらが伴わないことから考えて、本時期の所産と捉える。大久保氏の古墳編年では、讃岐 1 期に対応し、前方後円墳出現期となる。

#### 古墳前期 2 期

現在まで比定できる古墳が確定できない。但し、古墳前期 3 期に位置付けられる高松市茶臼山古墳と同系統の埴輪(船岡山型埴輪)をもち、型式学的に先行することが明らかな船岡山古墳は本時期に位置付けられる可能性がある。また、近年、様相が判明しつつある稻荷山姫塚古墳では、鶴尾神社 4 号墳出土の広口壺に形態的に類似する資料(高松市教委 2014 報文 8)も出土しており、本時期に遡る可能性をもつ。大久保氏の古墳編年では讃岐 2 期に相当する。

#### 古墳前期 3 期

高松市茶臼山古墳が該当する。前段階からの船岡山型埴輪は継続するが、普通円筒埴輪は未だ出現しない。大久保氏の古墳編年では讃岐 2 期に相当する。川東古墳は、広口壺 B3 型式を伴うことからみて、本時期に比定される。

土師器時期区分	主要古墳名	古墳編年	布留様式区分
古墳前期 1 期	丸井 鶴尾神社 4 号	讃岐 1 期	
古墳前期 2 期	↑?	↑? 船岡山 稲荷山姫塚 高松市茶臼山 川東	布留 0 式
古墳前期 3 期			
古墳前期 4 期古	野田院 快天山	↑? 国分寺六ツ目 猫塚 姫塚	布留 1 式
古墳前期 4 期新			
		讃岐 3 期	布留 2 式

図 73 古墳編年と土器編年の対応関係

## 古墳前期4期古段階

野田院古墳、快天山古墳が相当する。快天山古墳において、本節で検討した広口壺の存在は確定的ではないが、二重口縁壺（綾歌町教委2004第11図2）は仲村庵寺SH24出土資料に類似している。野田院古墳との時間的な関係が問題となるが、野田院古墳は一定量の広口壺B3型式を伴うことから、快天山古墳に僅かに先行して差された可能性が高い。快天山古墳では「短口縁」をもつ普通円筒埴輪と二重口縁の壺形埴輪が出現する。それぞれ大久保氏の古墳編年論の讃岐2期から3期が相当すると考えられる。

## 古墳前期4期新段階

国分寺六ツ目古墳が該当する。猫塚古墳は、出土したとされる広口壺形埴輪と本節で検討した広口壺形埴輪B形式との対応関係が課題として残るが、森下氏が指摘するように壺の肩部形態との相関関係があるとすれば、壺A7型式に対応するものとして本時期に位置付けることも不可能ではないが、広口壺以外の埴輪の出土が知られていないなど現時点での比較できる資料を欠いているため、確定的ではない（森下1997）。また、広口壺B6型式をもつ姫塚古墳は、型式的に国分寺六ツ目古墳出土の広口壺B5型式との距離が近い。壺型式との対応関係は残るもの、本時期に含まれると考えてよいだろう。大久保氏の古墳編年では讃岐3期に相当するとみられる。

以上、主に土師器によって区分した編年案と古墳の対応関係の整理を行った。古墳編年を土師器のみで行うには限界があるのは承知しているが、汎用性のある考古資料で高松市茶臼山古墳の相対年代がどの程度まで絞り込めるのかという点に拘り、敢えて提示しておきたい。

## 第3節 高松市茶臼山古墳出土人骨の観察

清家 章（高知大学）

人骨の数 高松市茶臼山古墳からは3体の人骨があることが知られていた（松本1983）。ただ詳しい分析が行われていなかった。松本1983の報告でとくに目を引くことは、第Ⅰ主体部の堅穴式石室から、中央の歯形石をはさんで2体の人骨があったことである。堅穴式石室は一般に1体の被葬者が想定されるから、2体埋葬であったとすればきわめて珍しい事例である。

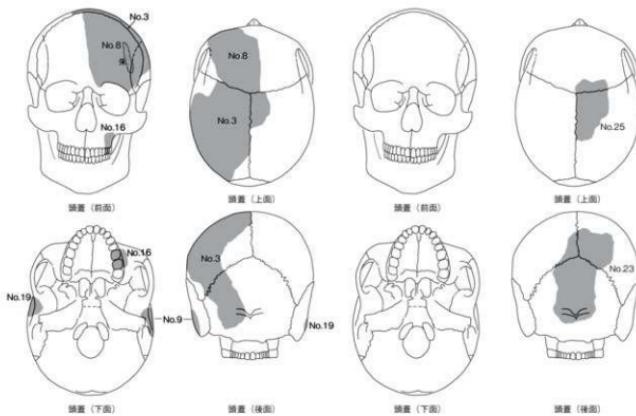
結論からいえば、堅穴式石室から出土した人骨は確かに2体分ある。堅穴式石室から検出された人骨はE地区とW地区に分けて取り上げられている。堅穴式石室の中央にある歯形石を境にして東西に地区を分けているのだと考えられる。

E地区の個体とW地区的個体はともに遺存が悪く、頭蓋骨を中心とするパートがあるにすぎない。しかしもE地区とW地区的個体は、後頭骨・右側頭骨・前頭骨の一部で重複するパートがあり、年齢差も認めることが可能である。以下、両人骨をE地区人骨・W地区人骨と呼び、前方部第Ⅲ主体部（箱形石棺）から出土した人骨とあわせ観察結果を報告する。

E地区人骨 頭蓋骨片と歯牙が遺存しているのみである。後頭骨と左右頸頂骨がラムダに中心を遺存している。また、右頭頂骨と前頭骨の一部が遺存している。右上顎大臼歯と下顎大臼歯が遺存しているが、前者の順位は不明で、後者も左右順位は不明である。

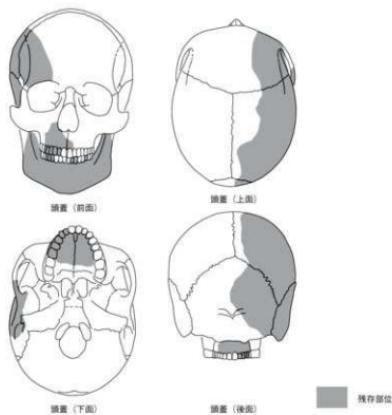
このように残りは悪いが、本人骨は男性である可能性がある。外後頭隆起がよく発達しているからである。頭蓋の主要縫合線は内板で完全に消失し、外板でも一部消失している。数本の歯冠ではあるが、面上に象牙質が露出している。このようなことから、老年以降の年齢ではないかと考えられる。

3 人骨



高松市茶臼山古墳第I主体部W地区（西群）人骨出土部位

高松市茶臼山古墳第I主体部E地区（東群）人骨出土部位



高松市茶臼山古墳第I主体人骨出土部位

图 74 人骨鑑定部位

#### 第4章 総括

資料番号	遺構名	地区	取り上げ番号	備見
N.o. 1	第1主体部	W(西側)	a	小破片 部位不明
N.o. 2	第1主体部	W(西側)	B裏(通)	
N.o. 3	第1主体部	W(西側)	d	左頭頂骨 右頭頂骨 後頭骨
N.o. 4	第1主体部	W(西側)	c(表)	
N.o. 5	第1主体部	W(西側)	j	
N.o. 6	第1主体部	W(西側)	G	
N.o. 7	第1主体部	W(西側)	e	小破片 部位不明
N.o. 8	第1主体部	W(西側)	H	側頭骨
N.o. 9	第1主体部	W(西側)	F・I	左側頭骨
N.o. 10	第1主体部	W(西側)	T	小破片 部位不明
N.o. 11	第1主体部	W(西側)	Q	小破片 部位不明
N.o. 12	第1主体部	W(西側)	P	
N.o. 13	第1主体部	W(西側)	O	上腕骨片?
N.o. 14	第1主体部	W(西側)	B( Bの下)	頭頂骨片 左右不明
N.o. 15	第1主体部	W(西側)	N	左上第1小白齒
N.o. 16	第1主体部	W(西側)	M	左上第1大臼歯 第1大臼歯 - 第2大臼歯付 左上第2大臼歯
N.o. 17	第1主体部	W(西側)	S	小破片 部位不明
N.o. 18	第1主体部	W(西側)	R	小破片 部位不明
N.o. 19	第1主体部	W(西側)	L	右側頭骨
N.o. 20	第1主体部	W(西側)	K	頭蓋骨片だが部位不明
N.o. 21	第1主体部	W(西側)	洞形石像(通)	下顎大臼歯 左右側頭骨不明
N.o. 22	第1主体部	E(東側)	U粘土上面	右上大臼歯
N.o. 23	第1主体部	E(東側)	b	後頭骨 左右頭頂骨
N.o. 24	第1主体部	E(東側)	b	小破片 部位不明
N.o. 25	第1主体部	E(東側)	c	右頭頂骨 前頭骨
N.o. 26	第1主体部	E(東側)	d	頭蓋骨片
N.o. 27	第1主体部	E(東側)	不明	
N.o. 28	第1主体部	E(東側)	J	小破片 部位不明
N.o. 29	第1主体部	E(東側)	k(通)	下顎骨片 下顎大臼歯2個 左右側頭骨不明
N.o. 30	第1主体部	E(東側)	不明	小破片 部位不明
N.o. 31	第1主体部	E(東側)	I	頭蓋骨片
N.o. 32	第1主体部	E(東側)	骨片一括	小破片 部位不明
N.o. 33	第1主体部	E(東側)	H	小破片 部位不明
N.o. 34	第1主体部	E(東側)	H	小破片 部位不明
N.o. 35	第1主体部			右頭頂骨 右側頭骨 後頭骨 右上頭骨

表2 人骨鑑定結果

W地区人骨 左頭頂骨の大部分と右頭頂骨、後頭骨、左上顎骨、左右側頭骨、上腕骨のそれぞれが一部遺存している。左上顎には第1大臼歯、第2大臼歯が残り、他に左下犬歯とおもわれる歯と下顎大臼歯が遺失した状態である。前頭骨の左と左頭頂骨にかけて水銀朱とみられる赤色顔料が付着している。

性別を判定する肝心の部位が失われており、性別の判定は難しい。遺存する範囲に限れば、頭蓋主要3縫合には縫合線の消失はみえない。歯冠は汚れが付着し観察が難いものがあるが、エナメル質の磨耗が見られ、象牙質も点的な露出にとどまるようである。壯年期の可能性があろう。

第三主体部人骨 松本1983の埋葬施設実測図には、頭蓋とともに大腸骨やその他の破片らしい骨片が描かれているが、今あるのは頭蓋骨のみである。右頭頂骨、右側頭骨、後頭骨、右上顎骨、下顎が遺存している。上顎骨には右第2切歯、犬歯、第1臼歯、第2小白歯、第1大臼歯が残っており、下顎骨には右第1小白歯、同第1大臼歯、左第2切歯、同犬歯、同第1大臼歯が残っていた。

全体的に大ぶりな頭蓋であり、下顎は頑丈で筋突起も大きい。グラベラも突出している。男性の可能性が考えられる。歯冠の磨耗は頗るあり全面で象牙質が露出している。両下顎とも第2大臼歯、第3大臼歯ではなく、歯槽は閉鎖している。老年以降の年齢が考えられよう。

参考文献 松本豊盈 1983「高松市茶臼山古墳」「香川の前期古墳」日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会、香川:pp.40-47

## 第5章 まとめと課題

高松市茶臼山古墳の埴丘は、前方部と比較して大型の後円部をもち、撥形に聞く前方部は低平で隆起があり認められないなど、本地域の古墳前期前半期でも古相を示す特徴をもつ。後円部の規模を把握できる材料に乏しいが、現況からみて約75mの増長が想定できる。後円部の中心主体となる第1主体部の堅穴式石櫛は、全長約5.5mを測り、入念な基底・控え積みを伴いながら高さ約1.5mにわたり板状安山岩の壁体を積み上げたのち、大型石材を架構する。出土した人骨から2体の埋葬が行われたことも確認されており、前期古墳の被葬者像を推定する良好な資料となり得る。各種副葬品、土師器や埴輪の検討から、古墳時代前期でも前半期、本地域においては鶴尾神社4号墳に代表される前方後円墳出現から1期隔てた段階の墓道であると推定した。石清尾山積石塚群における猫塚古墳の編年の位置付けが流動的ではあるが、埴丘・石櫛規模とともに、この時期の高松平野のみならず讃岐地域全域で最大となると考えられる。全長40m以下の小型前方後円墳が高頻度で築造される讃岐地域において、異彩を放つ状況にあることは今も変わりがなく、地域色が希釈されていく状況を端的に示していると考えられる。その一方で、埴丘規模に対して低平な前方部や船岡山型埴輪の樹立に象徴されるように、莊厳化された堅穴式石櫛や副葬品などの近畿の要素の挿入が突然、一方的に行われたわけではなく、墓道には在来の要素が多くに盛り込まれていることは重視されよう。鶴尾神社4号墳以後、継続的な墓道が行われた石清尾山塊の積石塚群と船岡山古墳・高松市茶臼山古墳など高松平野周辺部に築造された前方後円墳群との関係が、外部要素の獲得による首長間の牽制であるのか、首長権の交替を意味するのかは定かではない。この点は高松市茶臼山古墳を凌駕する約90m全長を誇る猫塚古墳の編年の位置が確定すれば、詳細な状況が判明するだろう。

ともあれ、高松平野の前方後円墳群の墓道状況は、小地域に前方後円墳が高頻度で築造される讃岐地域の古墳時代前期における政治的動向を反映していることは明らかであり、その中でも傑出した規模や副葬品を誇る高松市茶臼山古墳は重要な位置を占めている。

前方部頂及び前端部の第III～VII主体部とした小規模な埋葬施設については、これまで、副次的な埋葬施設として評価されることもあったが、本稿に確實に伴うものとはいえない。これらの主軸は埴丘主軸に直交、もしくはそれに近いもの示すが、前方部頂の第III・VII主体を典型として平面位置は埴丘主軸からは外れる。また、同様の構築方法を小規模な埋葬施設が、隣接する久米池南遺跡B地区、北方の久米池南遺跡A地区、同傍生山地区においても多数確認されており、高松市茶臼山古墳付近に限定してみられる状況はない。前方部で出土したU字形櫛・鍬先や第VI主体部の布留系甕からも窺えるように、墓道後の一定期間経た後の古墳前期後半以降に、久米山丘陵全域が無埴丘の小規模な埋葬施設群から成る墓域として利用された際に形成された遺構と考えられよう。

以上のように、今回の報告書の刊行によって明らかになった事項も多い一方で、高松市茶臼山古墳の更なる歴史的価値付けを行うためには、幾つかの課題が残っている。第3章第1節で報告したように、調査途中で現状保存が決定したために、埴丘のトレンチの中には調査途中で埋め戻されたものが存在することや、後円部と括れ部においてトレンチが不足しているために詳細な墳形・規模を確定させるための材料を欠いている。特に、近年の県内における古墳前期前方後円墳の調査研究の進展に伴い、埴丘の側面観も編年の位置付けを行なう際の重要な指標なることが明らかになっている(大久保2013)。県指定史跡として現状保存されていることから、今後の再検証が可能な事項であると考えられる。

## 第5章 まとめと課題

また、後円部南東側斜面に露出していた第Ⅰ・Ⅱ主体部に伴う排水溝の記録作成が行えていない。現状保存を維持するための法面保護と同時に記録作成を行う必要がある。

諸般の事情により、現地調査完了から約40年が経過した後の整理作業の実施となり、十分に所見を反映できることは言えないものとなつたが、各関係者の尽力により、現時点での可能な限りの情報を掲載することは行えたと考える。今後の調査・研究の出発点として本報告書を活用されることを希望したい。

大阪府教育委員会他 1999 「河内平野遺跡群の獣面像 近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 南道跡群 獣生時代後期～古墳時代前期～」

高松市教育委員会 1983 「鷹尾神社 4号墳調査報告書」

高松市教育委員会 1995 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 居石道跡」

高松市教育委員会 2001 「高松市道路網三谷地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 木太中村道跡」

高松市教育委員会 2010 「高松市内道跡発掘調査報告 - 平成21年度国庫補助事業 -」

高松市教育委員会 2011 「高松市内道跡発掘調査報告 - 平成22年度国庫補助事業 -」

高松市教育委員会 2012 「高松市内道跡発掘調査報告 - 平成23年度国庫補助事業 -」

高松市教育委員会 2013 「高松市内道跡発掘調査報告 - 平成24年度国庫補助事業 -」

高松市教育委員会 2014 「高松市内道跡発掘調査報告 - 平成25年度国庫補助事業 -」

香川県教育委員会 1989 「御座山古墳群」『香川県埋蔵文化財調査小報昭和63年版』

香川県教育委員会他 1990 「瀬戸内海に架かる橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7 下川津道跡」

香川県教育委員会他 1990 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 延命道跡」

香川県教育委員会他 1995 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第16冊 川津二代取道跡」

香川県教育委員会他 1995 「高松東道跡建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 六条・上所道跡」

香川県教育委員会他 1996 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪道跡1」

香川県教育委員会他 2002 「サンボート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 西打道跡II」

香川県教育委員会他 2004 「一般国道32号高浜バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 賀田岡下道跡」

香川県教育委員会他 2004 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 空港跡地道跡Ⅱ」

香川県教育委員会他 2009 「香寺寺跡と香寺学校跡及び続業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 旧兵場跡道跡」

高松市教育委員会 1989 「仲村廃寺・旧練兵場道跡における理文化財の確認調査報告書」

高松市教育委員会 2003 「史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備事業報告書」

長尾町教育委員会 1991 「[II] 丸井古墳発掘調査報告書」

大久保徹也 1990 「下川津道跡における古墳時代後半から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

報告7 下川津道跡』財团法人香川県埋蔵文化財調査センター他

大久保徹也 1993 「講義における古墳時代初頭の土器について -下川津道跡以降の様相-」『財团法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要1』財团法人香川県埋蔵文化財調査センター

大久保徹也 1996a 「第5章」と「第5章備埴輪」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊中間西井坪道跡1』

香川県教育委員会他

大久保徹也 1996b 「第5章」と「第2回同簡埴輪」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊中間西井坪道跡1』

香川県教育委員会他

大久保徹也 2000 「香家川下流域土生の生産と流通」『初期播磨と大和の考古学』

大久保徹也 2004 「講義及び近地城の前方後円式成立時期の土器様相」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

大久保徹也 2013 「第6章津清浦・津田川流域に所在する前半期主要古墳の編年整理」『津田川古墳群調査報告書』第二分冊考察篇 さぬき市教育委員会

川畠 純 2009 「前・中期古墳副葬の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号 史学研究会

藏本晋司 1999 「第4章第1節 講義における古墳出現の背景 - 東四国系土器群の提唱とその背景についての若干の考察 - 」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要1』

藏本晋司 2004 「丸亀吉岡神社古墳の再検討 - 供獻土器のありかたを中心として - 」『財团法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要1』財团法人香川県埋蔵文化財調査センター

杉本厚典 2003 「河内における布留式期の細分と各地との併行関係」『古墳出現期の土器と実年代』シンポジウム資料集 (財) 大阪府文化財センター

寺沢 薫 1996 「畿内土師器の編年と二・三の問題」『矢部道路』奈良県橿原考古学研究所

豊島直博 2010 「鉄製武器の流通と初期国家形成」

廣瀬 覚 2009 「前宮古墳の埴輪」『前宮古墳の変化と歴史』考古学研究会開西会 160回シンポジウム

廣瀬 覚 2011 「埴輪の編年」『西日本の円筒埴輪』『古墳時代の考古学1 古墳時代史の枠組』同成社

北條芳隆 1994 「埴輪石の型式学的研究」『考古学雑誌』第79巻第4号

北條芳隆 1996 「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究 考察編』八日市市教育委員会

森下美治 1997 「第6章考古学的考察 1) 国分寺六ヶ日古墳出土広口壺の編年の位置」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第28冊六ヶ日古墳』香川県教育委員会他

若林邦彦 2003 「中河内地域における古式土師器変化の定点観測」『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集 (財) 大阪府文化財センター

## 埴輪・土器觀察表

## 観察表

剖面番号	場所	試験地番号	試験地名	色調(4)	色調(5)	色調(6)	地質
26	土器遺物層	第1主・主体部内 No.11		5YR 4.6 中地	7.5YR 5.8 明暗	7.5YR 5.8 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)、浮遊石
27	土器遺物	第1主・主体部外 No.9 地質層		2.5YR 4.4 - 5.5 中地	10YR 7.5 中地	10YR 7.5 中地	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
28	土器遺物	第1主・主体部外 No.9 地質層		2.5YR 4.4 - 5.5 中地	10YR 6.0 中地	10YR 6.0 中地	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
29	土器遺物	第1主・主体部外 No.9 地質層中 No.5		5YR 5.0 明暗	5YR 6.0 中地	5YR 6.0 中地	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
30	土器遺物	第1主・主体部外 No.9 地質層中 No.5		5YR 5.0 明暗	5YR 6.0 中地	5YR 6.0 中地	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
43	砂岩土器	出土品		10YR 6.4 - 7.5 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
44	朱色土器	燒		7.5YR 4.4 - 5.5 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
45	朱色土器	口縁		2.5YR 7.8 明暗	2.5YR 7.8 明暗	2.5YR 7.8 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
36	朱色土器	長頸瓶	AV主・主体部外	10YR 6.4 - 7.5 中地	10YR 6.4 - 7.5 中地	10YR 6.4 - 7.5 中地	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
37	朱色土器	長頸瓶	AV主・主体部外	2.5YR 7.8 明暗	2.5YR 7.8 明暗	2.5YR 7.8 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
38	朱色土器	瓶	AV主・主体部外	2.5YR 7.8 明暗	2.5YR 7.8 明暗	2.5YR 7.8 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
49	朱色土器	瓶	AV主・主体部外	10YR 7.6 明暗	7.5YR 6.8 明暗	7.5YR 6.8 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
50	朱色土器	瓶	AV主・主体部外?	5YR 5.4 - 6.5 中地	7.5YR 4.4 - 5.5 中地	7.5YR 4.4 - 5.5 中地	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
51	円筒埴輪	口縁		10YR 6.4 - 7.5 中地	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
52	朱色土器	杯	第1主・主体部	5YR 5.4 - 6.5 中地	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
53	朱色土器	燒	第1主・主体部	7.5YR 6.0 中	7.5YR 6.0 中	7.5YR 6.0 中	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
54	朱色土器	燒	RLST	7.5YR 6.0 中	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
55	円筒埴輪	口縁	RLST	7.5YR 6.0 中	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
56	円筒埴輪	側面	RLST	7.5YR 6.0 中	10YR 6.6 明暗	10YR 6.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
57	円筒埴輪	側面突起	RLST	2.5YR 7.8 中地	7.5YR 6.0 中	7.5YR 6.0 中	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
58	朱色土器	燒杯	RLST	10YR 6.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
59	円筒埴輪	口縁	RLST	3.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
60	円筒埴輪	口縁	RLST	7.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
61	円筒埴輪	側底	RLST	7.5YR 6.0 中	7.5YR 6.0 中	7.5YR 6.0 中	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
62	円筒埴輪	側底突起	RLST	2.5YR 7.8 中地	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
63	円筒埴輪	側底	RLST	7.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
64	円筒埴輪	側底	RLST	5YR 5.6 明暗	5YR 6.0 明暗	5YR 6.0 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
65	円筒埴輪	側底	RLST	10YR 5.3 - 7.5 中地	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
66	円筒埴輪	側底突起	RLST	7.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
67	円筒埴輪	側底突起	RLST	7.5YR 6.0 中地	10YR 5.4 - 6.5 明暗	10YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
68	円筒埴輪	側底突起	RLST	7.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
69	円筒埴輪	側底突起	RLST	7.5YR 4.4 - 5.5 中地	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	7.5YR 5.4 - 6.5 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
70	円筒埴輪	側底突起	RLST	7.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)
71	円筒埴輪	側底	RLST	7.5YR 6.0 中地	7.5YR 5.6 明暗	7.5YR 5.6 明暗	砂岩を多く含む 内面に赤色顔料(茶)

表3 土器・埴輪観察表1

標本番号	種名	原産地名	色調(%)	色調(%)	地土	備考
72	川島輪輪 勃起部	ZL.3T	75% 5.6 明晦	75% 6.4 深紅	石灰岩、鈣質石を多く含む 白根材、鈣質石を多く含む	外側に白色樹皮 外側に褐色剥落
73	新生十齿 轮剥皮	ZL.TT	75% 6.4 深紅	75% 6.5 深紅	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
74	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 5.6 明晦	75% 5.6 深紅	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
75	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
76	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
77	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 6.6 暗	75% 6.4 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
78	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
79	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 5.8 明晦	75% 5.4 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
80	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 5.6 明晦	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
81	川島輪輪 口接	ZL.TT	75% 6.4 暗	75% 6.8 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
82	川島輪輪 勃起部	ZL.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
83	川島輪輪 勃起部	ZL.TT	75% 6.6 暗	75% 6.8 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
84	川島輪輪 勃起部	ZL.TT	75% 6.8 明晦	75% 6.8 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
85	川島輪輪 勃起部	ZL.TT	75% 5.6 明晦	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
86	川島輪輪 勃起部	ZL.TT	75% 6.6 明晦	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
87	川島輪輪 勃起部	ZL.TT	75% 6.6 明晦	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
88	新生十齿 勃起部	ZL.TT	75% 5.3 - 5.4 深紅	75% 5.1 - 5.5 深紅	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
89	新生十齿 勃起部	ZL.TT	75% 6.6 明晦	75% 7.1 - 7.5 深紅	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
90	新生十齿 勃起部	ZL.TT	75% 6.6 明晦	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
91	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 4.4 - 5.1 深紅	75% 4.4 - 5.1 深紅	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
92	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 明晦	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
93	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 明晦	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
94	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 明晦	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
95	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 5.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
96	川島輪輪 勃起部	ZR.TT	75% 5.6 暗	75% 6.4 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
97	川島輪輪 勃起部	ZR.TT	75% 5.6 暗	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
98	川島輪輪 勃起部	ZR.TT	75% 5.6 暗	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
99	川島輪輪 勃起部	ZR.TT	75% 5.6 暗	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
100	川島輪輪 勃起部	ZR.TT	75% 5.6 暗	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
101	新生十齿 勃起部	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 7.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
102	新生十齿 口接	ZR.TT	75% 4.6 暗	75% 4.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
103	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
104	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
105	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 6.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
106	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 5.5 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
107	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
108	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 6.8 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
109	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 5.5 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落
110	川島輪輪 口接	ZR.TT	75% 6.6 暗	75% 5.6 暗	白根材、鈣質石を多く含む	外側に褐色剥落

表4 土器・埴輪観察表2

觀察者

表 5 土器・埴輪觀察表 3

前文番号	種別	施主位置・部品名	色調(外)	色調(内)	施主(内)・角圓石等々多・合	施主(外)・角圓石等々多・合	備考
154	円筒埴輪 人物	出土位置不明	25YR 5.4 明褐色	10YR 6.0 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
155	円筒埴輪 頭部	出土位置不明	75YR 5.4 12.6%・黒	7.5YR 6.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
156	円筒埴輪 背部	出土位置不明	5YR 5.8 明褐色	5YR 6.8 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
157	円筒埴輪 脚部	出土位置不明	7.5YR 6.4 12.6%・黒	7.5YR 6.6 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	(透孔・三角形)
158	円筒埴輪 頭部	出土位置不明	25YR 6.4 12.6%・黒	2.5YR 6.5 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
159	円筒埴輪 人物	出土位置不明	25YR 6.6 黒	10YR 6.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
160	円筒埴輪 人物	出土位置不明	75YR 5.4 12.6%・黒	7.5YR 6.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	外面に赤色顔料
161	円筒埴輪 人物	出土位置不明	25YR 4.8 明褐色	5YR 5.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	外面に赤色顔料
162	円筒埴輪 人物	出土位置不明	10YR 5.6 12.6%・黒	5YR 5.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
163	円筒埴輪 人物	出土位置不明	2.5YR 5.4 黑	2.5YR 4.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	(透孔・三角形？)
164	円筒埴輪 人物	出土位置不明	25YR 5.6 明褐色	5YR 8.8 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	(透孔・三角形？)
165	円筒埴輪 人物	出土位置不明	2.5YR 6.6 黒	5YR 8.8 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	(透孔・三角形)
166	円筒埴輪 人物	出土位置不明	25YR 6.4 黒	7.5YR 6.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	外面に赤色顔料
167	円筒埴輪 人物全体	出土位置不明	5YR 4.6 明褐色	2.5YR 5.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
168	円筒埴輪 人物全體	出土位置不明	10YR 6.6 明褐色	10YR 6.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
169	円筒埴輪 人物全體	出土位置不明	2.5YR 5.6 明褐色	2.5YR 5.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
170	円筒埴輪 人物全體	出土位置不明	25YR 5.6 明褐色	2.5YR 5.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
171	円筒埴輪 人物	出土位置不明	25YR 5.6 明褐色	2.5YR 5.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
172	円筒埴輪 人物	出土位置不明	75YR 5.4 12.6%・黒	7.5YR 6.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
173	浮生土器 稲	復元品	5YR 6.6 明褐色	5YR 6.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
174	浮生土器 稻	復元品	7.5YR 5.4 12.6%・黒	7.5YR 5.4 12.6%・黒	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	
175	浮生土器 稲	復元品	5YR 5.6 明褐色	5YR 5.6 明褐色	石英R、角圓石等々多・合	石英R、角圓石等々多・合	

表 6 土器・埴輪観察表 4

# 写 真 図 版

図版1 墳丘



1 遠景 東から

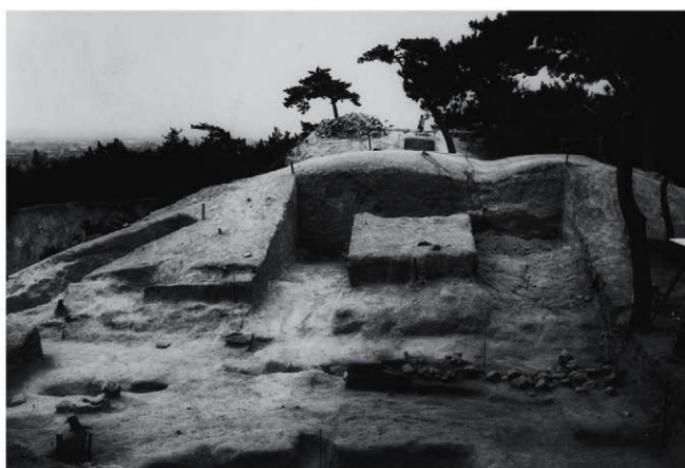


2 遠景 南から

図版 2 墳丘・前方部



3 墳丘の全景 南東から



4 前方部及び前端部の全景 北東から

図版3 前方部・前端部



5 前方部端のカット面(左は第VI主体部) 北西から

6 前方部端のカット面(中央は第VI主体部と敷石状遺構) 南東から



図版 4 前方部・前端部



7 前端部 ZR1T 土師器甕 (99)・高杯 (100) と転落石材 南東から

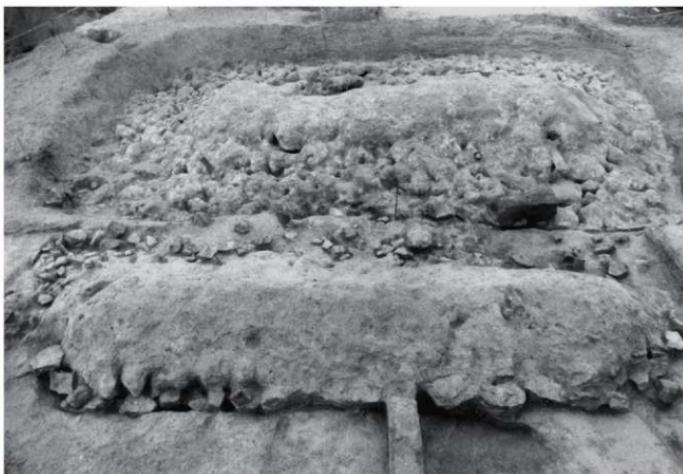


8 ZR1T 西壁の前方部埴丘盛土 東から



9 ZR1T 南壁の前方部埴丘盛土 北から

図版 5 後円部第 I・II 主体部



10 第 I・II 主体部被覆粘土(手前第 II 主体部) 北から



11 第 I・II 主体部被覆粘土(手前第 I 主体部) 南西から

図版6 後円部第I・II主体部



12 第I・II主体部間の被覆粘土(右側第II主体部) 東から



13 第I・II主体部被覆粘土上面作業風景 北から

図版 7 後円部第 I・II 主体部



14 第 I・II 主体部天井石検出(東半分 手前第 II 主体部) 北から



15 第 I・II 主体部天井石検出(西半分 手前第 I 主体部) 南から

図版 8 後円部第 I・II 主体部



16 第 I・II 主体部天井石検出（西半分 手前第 II 主体部）北から



17 第 I・II 主体部天井石検出（東半分 手前第 I 主体部）南から

図版 9 後円部第 I・II 主体部



18 第 I・II 主体部天井石検出(手前第 II 主体部) 北から

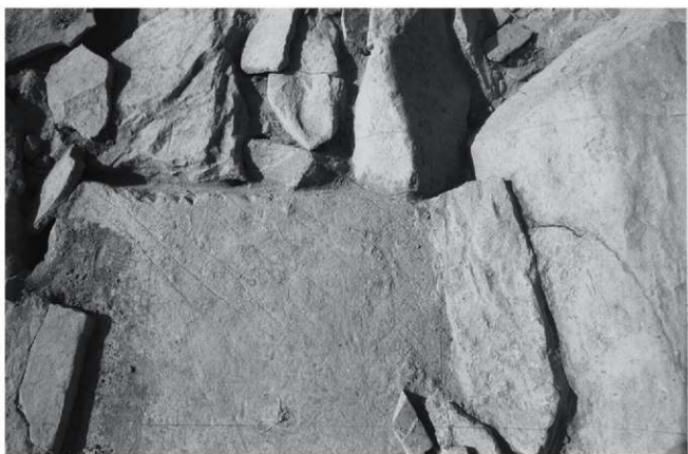


19 第 I 主体部天井石検出 南西から

図版 10 後円部第 I 主体部



20 第 I 主体部天井石検出 南西から



21 第 I 主体部天井石間詰石材 1 北から

図版 11 後円部第 I 主体部



22 第 I 主体部天井石  
間詰石材 2 北から



23 第 I 主体部天井石  
間詰石材 3 北から



24 第 I 主体部天井石  
間詰石材 4 北から

図版 12 後円部第 I・II 主体部



25 第 I・II 主体部天井石除去・壁体上部検出(手前第 I 主体部) 南西から



26 第 I・II 主体部天井石除去・壁体上部検出(右は第 I 主体部) 西から

図版 13 後円部第 I・II 主体部



27 第 I・II 主体部壁体上部と大型石材(右は第 I 主体部) 西から

図版 14 後円部第 I 主体部



28 第 I 主体部壁体上部検出 西から

図版 15 後円部第 I 主体部



29 天井石の除去と実  
測作業風景  
南東から

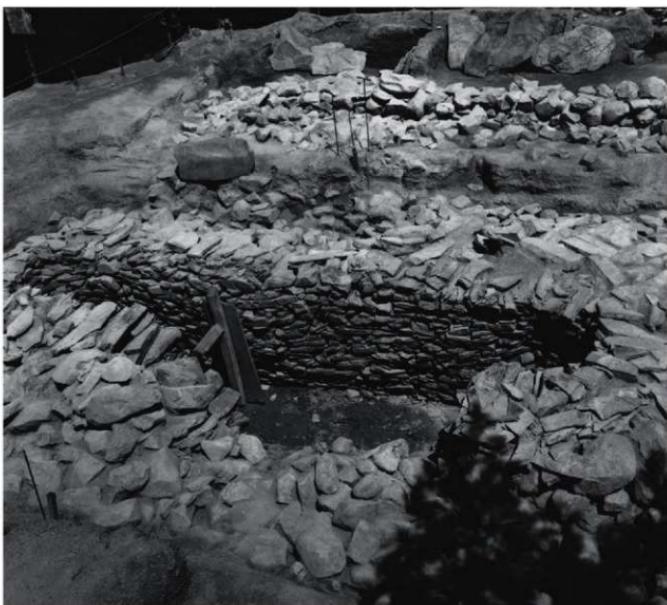


30 第 I 主体部西部の  
南側壁上部崩落状況  
南東から



31 第 I 主体部西部の  
南側壁上部崩落状況  
南から

図版 16 後円部第 I 主体部



32 第 I 主体部北側壁  
南東から



33 第 I 主体部北側壁  
南東から

図版 17 後円部第 I 主体部



34 第 I 主体部側壁と東小口壁 西から



35 第 I 主体部側壁と西小口壁 東から



36 第 I 主体部天井石見上げ 東から



37 第 I 主体部南側壁崩落に伴う壁体の孕み 西から

図版 18 後円部第 I 主体部

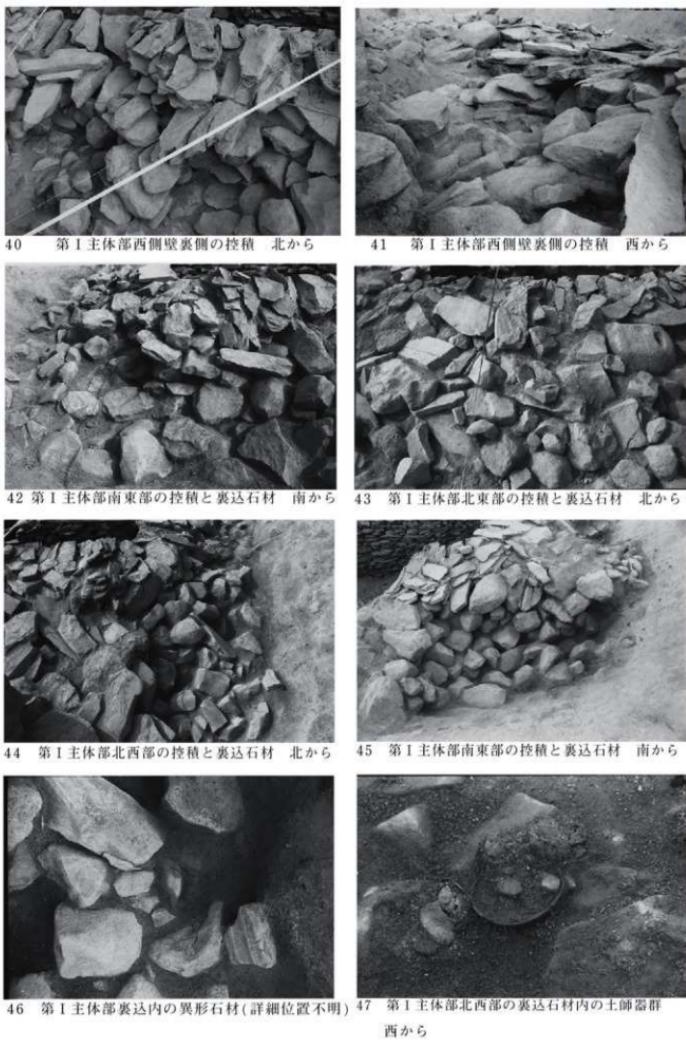


38 第 I 主体部東小口壁体 西から

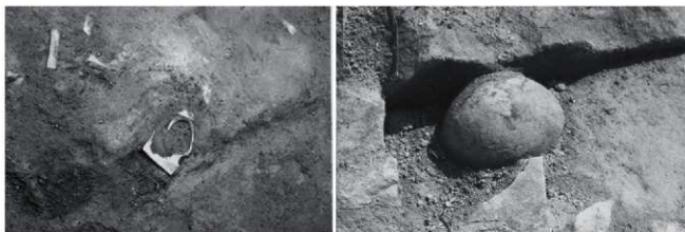


39 第 I 主体部西小口壁体 東から

図版 19 後円部第 I 主体部



図版 20 後円部第 I 主体部



48 第 I 主体部中央部鉛形石(2)出土状況 北東から 49 第 I 主体部中央部南側壁際土器(26)出土状況 北から



50 第 I 主体部東部北側壁際鉄劍(7)出土状況 南から 51 第 I 主体部中央部北側壁際副葬品出土状況 南から



52 第 I 主体部中央部北側壁際副葬品出土状況 南から

図版 21 後円部第 I 主体部



53 第 I 主体部中央部東部  
大刀(4)出土状況  
西から



54 第 I 主体部中央東部大刀(4)出土状況 南から



55 第 I 主体部中央部棺床粘土内菅玉出土状況



56 第 I 主体部西側の墓壙と北側壁下部、西側壁下部上位石材 東から



57 第 I 主体部壁体下部の円縁群検出状況 西から

図版 23 後円部第 I 主体部



58 第 I 主体部壁体下部  
の円礫群検出状況  
北東から



59 第 I 主体部東小口壁  
体基底石材と植床粘土下  
位の円礫群 西から

図版 24 後円部第 I 主体部



60 第 I 主体部壁体基部上位石材と  
棺床粘土検出状況 西から



61 第 I 主体部西部の墓壙、北側  
壁、裏込石材断面 南西から

図版 25 後円部第Ⅱ主体部



62 第Ⅱ主体部被覆粘土と天井石の関係 北から



63 第Ⅱ主体部壁体上面検出状況 西から

図版 26 後円部第Ⅱ主体部



64 第Ⅱ主体部側壁、西小口壁、棺床検出状況 東から

図版 27 後円部第Ⅱ主体部



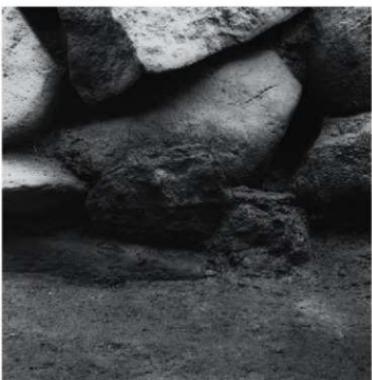
65 第Ⅱ主体部側壁、東小口壁、棺床検出状況 西から



66 第Ⅱ主体東部天井石架構状況 西から



67 第Ⅱ主体部東小口壁上面と天井石の関係 西から

68 第Ⅱ主体部東部北側壁際の大型鐵鎌様鉄器  
(31.32) 出土状況 南から69 第Ⅱ主体部東部鉄劍(33)出土状況  
北 東から70 第Ⅱ主体部東部北側壁際の副葬鉄器  
(37.38.40) 出土状況 南から

図版 29 第Ⅲ主体部



71 第Ⅲ主体部箱形棺蓋  
石検出状況 南東から



72 第Ⅲ主体部箱形棺側壁・  
小口石材検出状況 南東から



73 第Ⅲ主体部箱形棺内人  
骨(頭骨)出土状況  
南東から

図版 30

第 IV・V・VI 主体部



74 第 IV 主体部(木棺墓)検出状況 南東から



75 第 IV 主体部(木棺墓)棺床粘土検出 北西から



76 第 V 主体部(箱形石棺)蓋石検出 北東から



77 第 V 主体部(箱形石棺)側壁・小口検出状況 北西から



78 第 V 主体部(箱形石棺)側壁・  
小口検出 南東から



79 第 VI 主体部(箱形石棺)棺検出状況 南東から

图版 31 第VI・VII主体部 配石土坑



80 第VI主体部北西小口部土師器甕(49)出土状況



82 第VI主体部北西小口部と土師器甕(49) 南東から



81 第VI主体部北西小口部土師器甕(49)出土状況

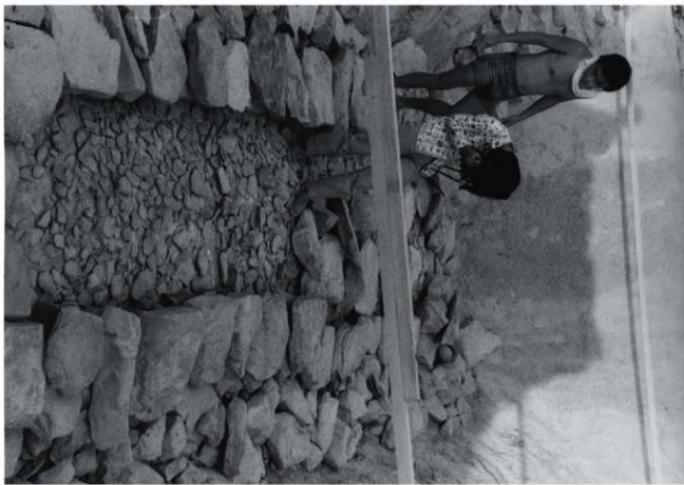


83 第VII主体部完掘状況 南東から



84 第VII主体部と配石土坑 北西から

図版 32 整備 第 I 主体部



85 第 I 主体部壁体下部石材復元状況 西から

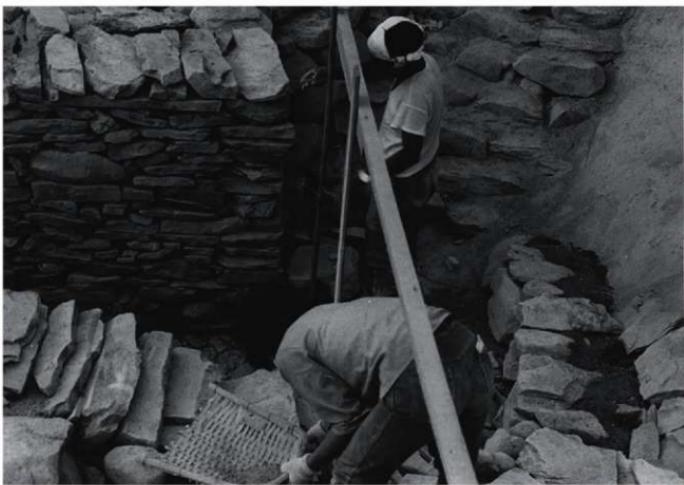


86 第 I 主体部西部壁体復元状況 北東から

図版 33 整備 第 I 主体部

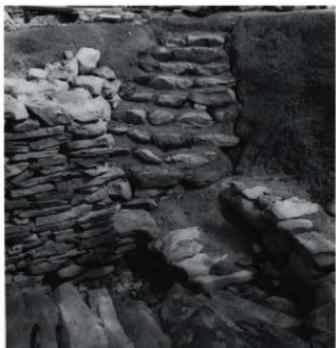


87 第 I 主体部西部壁体復元状況 東から



88 第 I 主体部東部壁体復元状況 南から

図版 34 整備 第 I 主体部



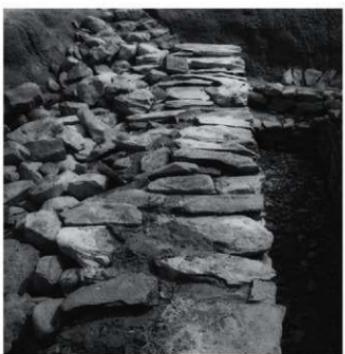
90 第 I 主体部東部壁体復元状況 南から



91 第 I 主体部中央南側壁復元状況 北から



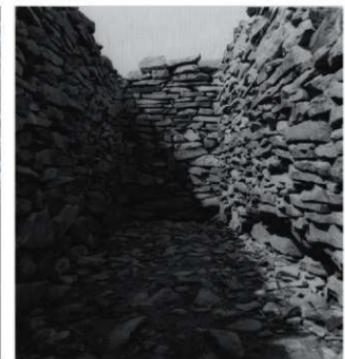
90 第 I 主体部中央北側壁復元に伴うモルタル詰め南から



92 第 I 主体部中央北側壁復元に伴うモルタル詰め西から

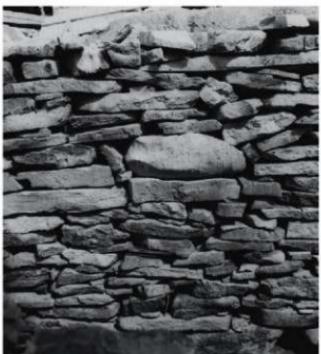


93 第 I 主体部西部壁体と天井石架構状況 南東から



94 第 I 主体部西部壁体復元状況 東から

図版 35 整備 第 I 主体部



95 第 I 主体部側壁復元状況



98 第 I 主体部天井石架構状況



96 第 I 主体部西部壁体上面復元状況 東から



97 第 I 主体部西部復元天井石架構状況 北東から



99 第 I 主体部天井石架構状況

図版 36 整備 後円部・前方部



100 後円部西側の解説板の設置状況

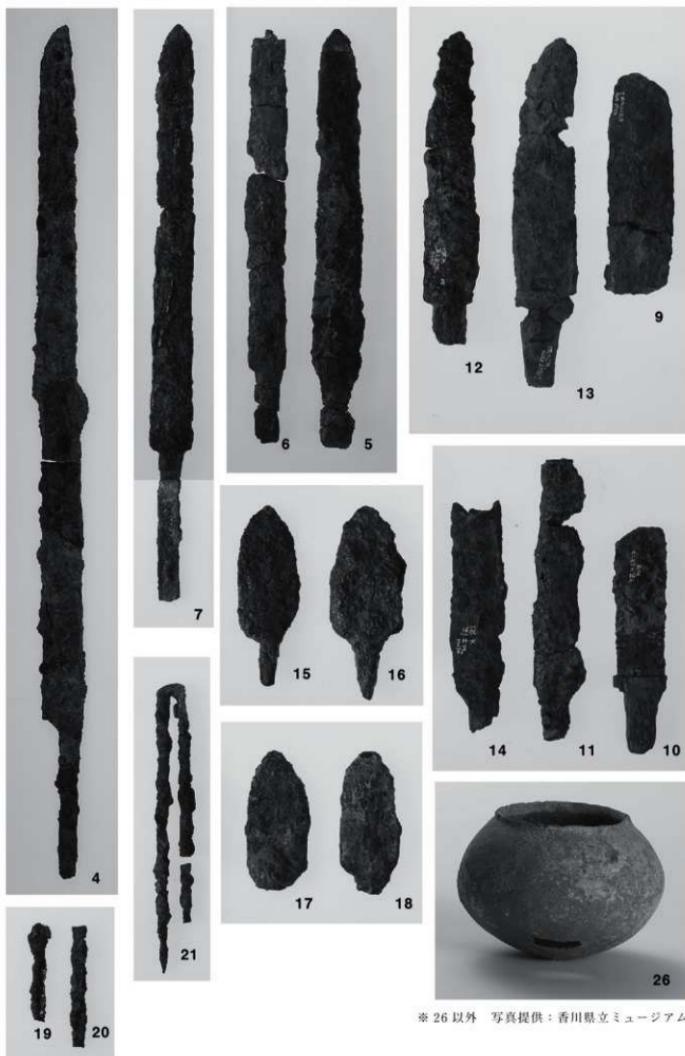


101 前方部の保護層敷設状況  
東から



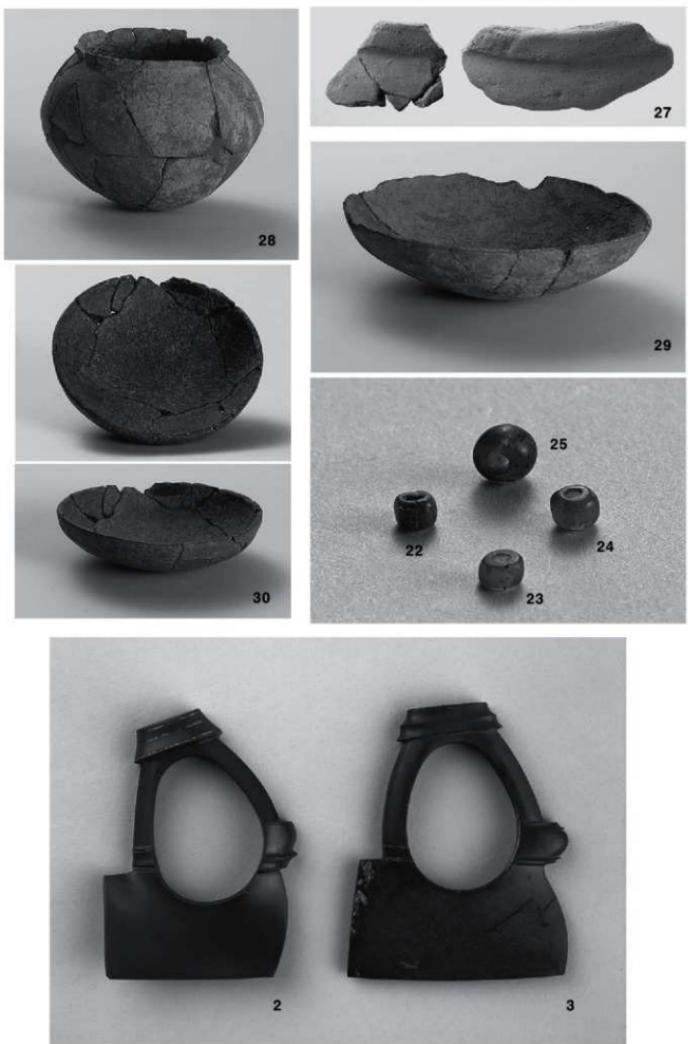
102 前方部の保護層敷設状況  
南東から

図版 37 出土遺物 第 I 主体部 鉄器・土師器



\* 26以外 写真提供：香川県立ミュージアム

図版 38 出土遺物 第 I 主体部 土師器・鍼形石・ガラス小玉



※2、3 写真提供：香川県立ミュージアム

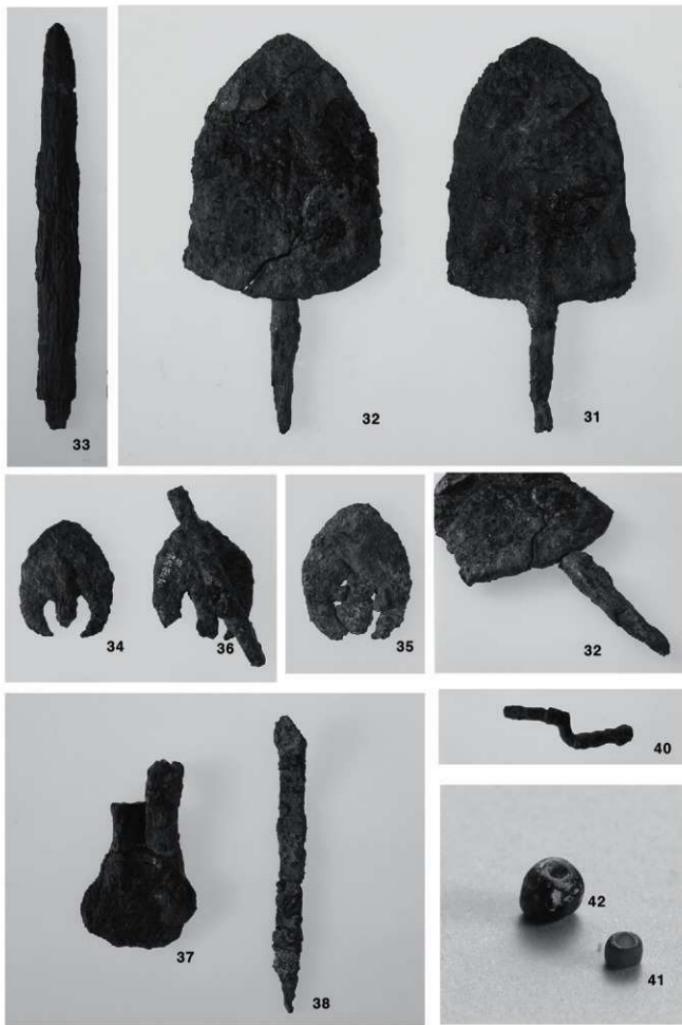
図版 39 出土遺物 第 I 主体部 画文帶神獸鏡



1

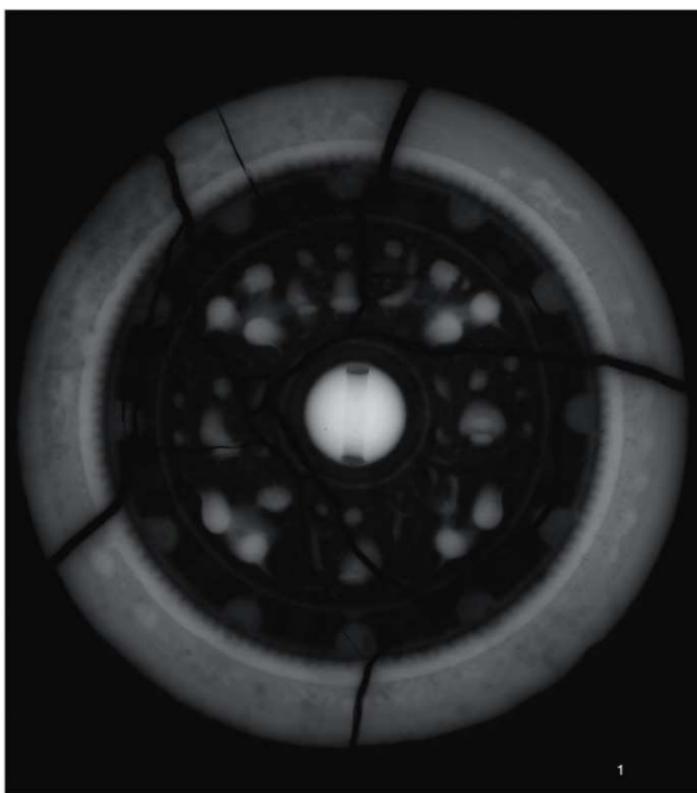


図版 40　出土遺物 第Ⅱ主体部 鉄器・ガラス小玉

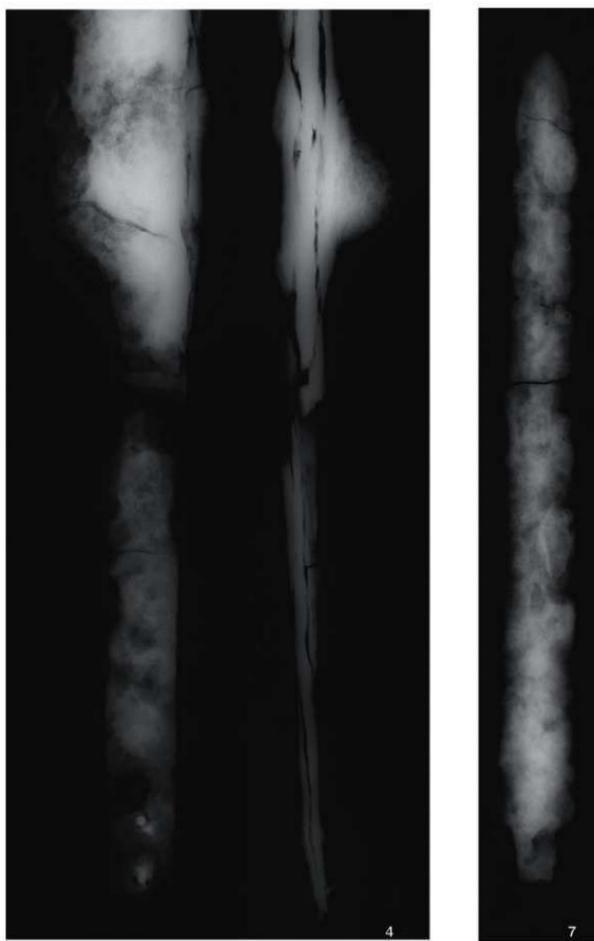


※ 41、42以外 写真提供：香川県立ミュージアム

図版 41 出土遺物 第 I 主体部 画文帶神獸鏡 X 線

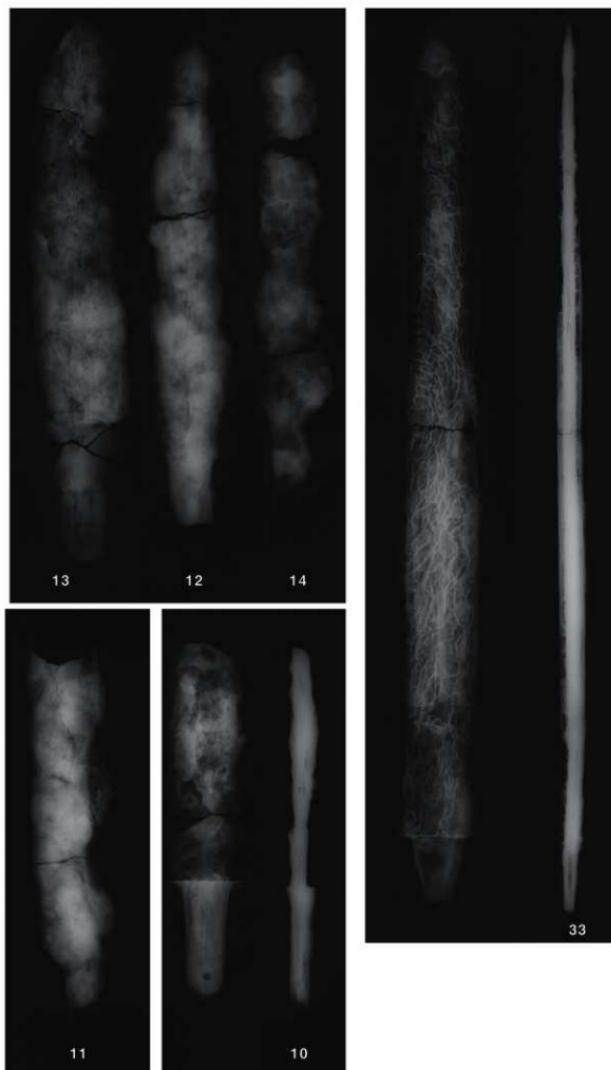


図版 42　出土遺物 第 I 主体部 鉄器 X 線



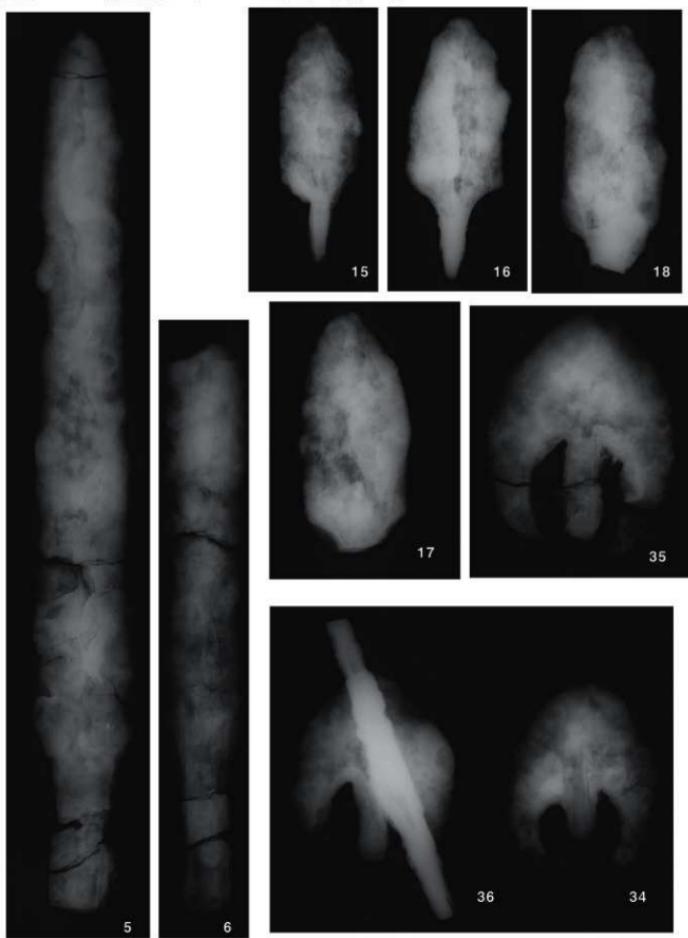
写真提供：香川県立ミュージアム

図版 43 出土遺物 第 I・II 主体部 鉄器 X 線



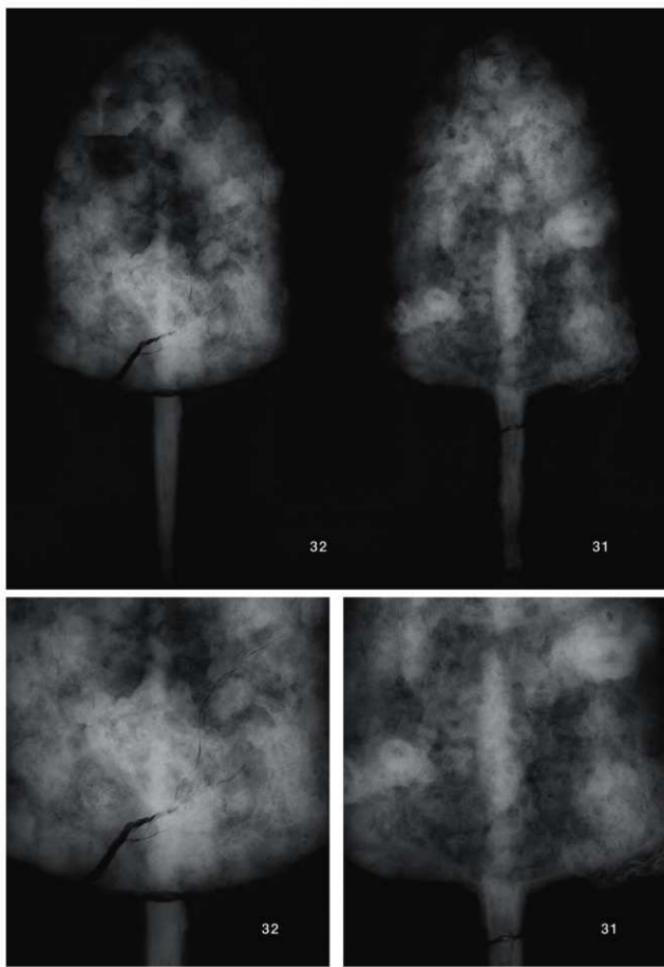
写真提供：香川県立ミュージアム

図版 44 出土遺物 第 I・II 主体部 鉄器 X 線



写真提供：香川県立ミュージアム

図版 45 出土遺物 第Ⅱ主体部 鉄器 X 線

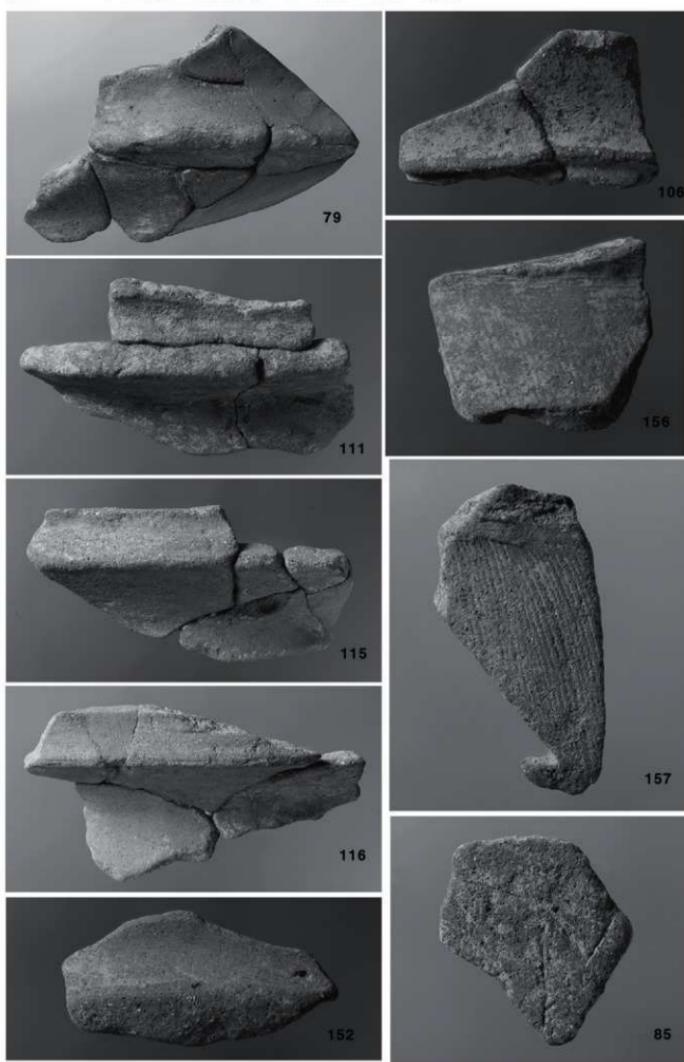


写真提供：香川県立ミュージアム

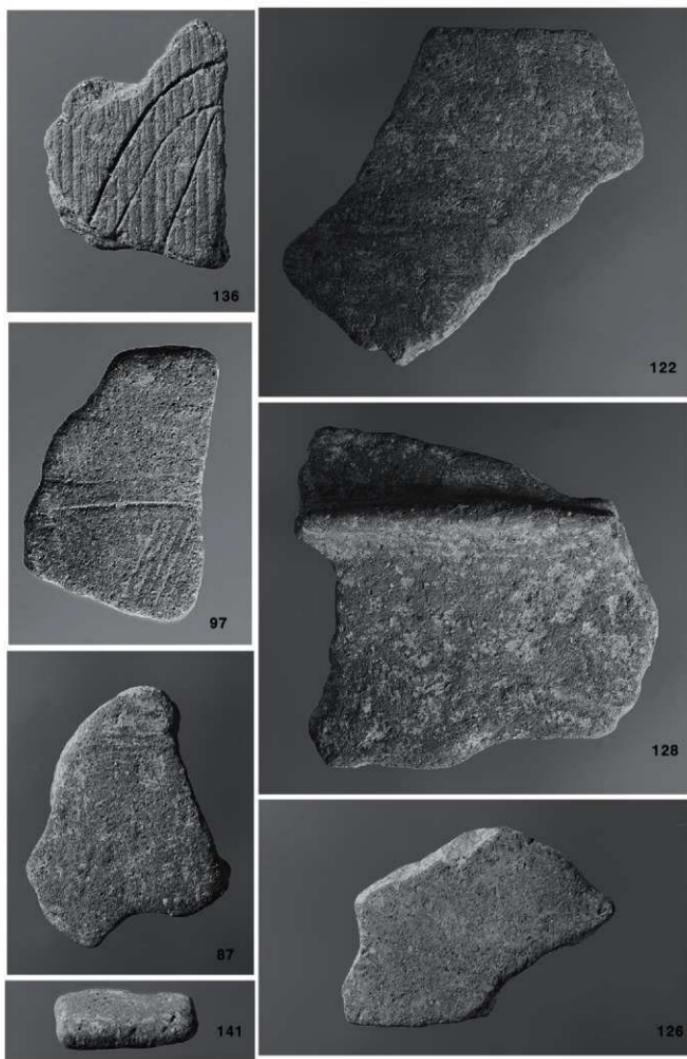
图版 46 出土遗物 土师器·埴輪



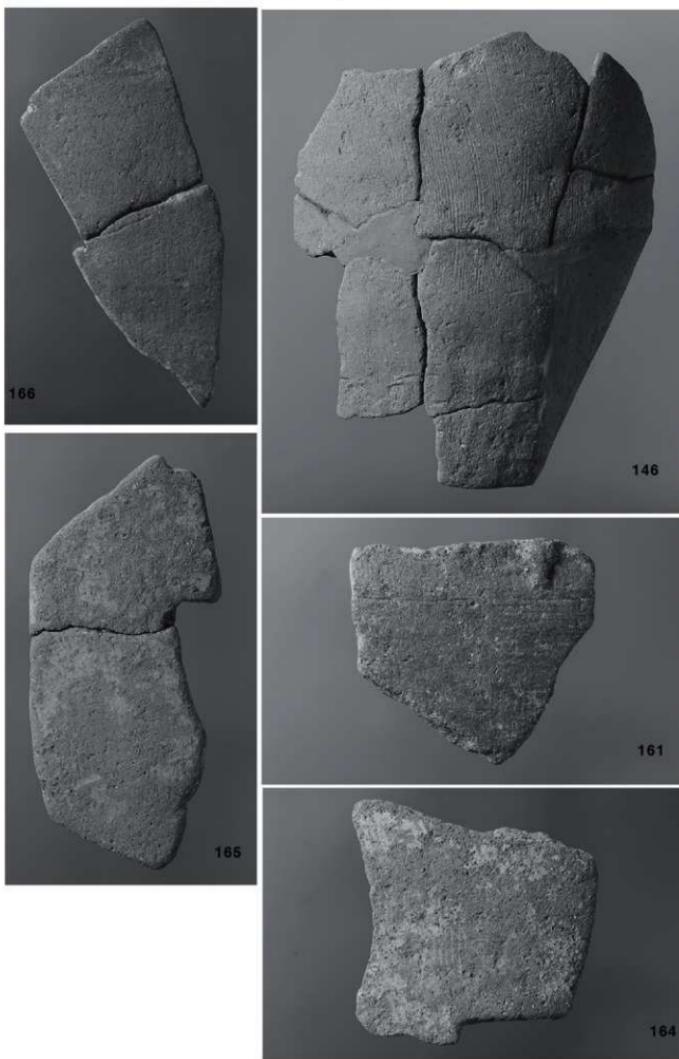
図版 47 出土遺物 円筒埴輪口縁・頸部・透孔・線刻



图版 48 出土遗物 圆筒埴輪胸部·突带·线刻·透孔



図版 49 出土遺物 円筒埴輪胴部・突帶・透孔



图版 50 出土遗物 圆筒埴輪底部



図版 51 出土遺物 第 I 主体部 人骨西群



図版 52 出土遺物 第 I 主体部 人骨東群



図版 53　出土遺物 第Ⅲ主体部 人骨



報告書抄録

高松市茶臼山古墳

平成 26 年 11 月 14 日 発行

編集 香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024 香川県坂出市府中町南谷 5001-4

電話 0877-48-2191

発行 香川県教育委員会

印刷 株式会社美巧社